

## ア行、カ行

(INDEX)

<青木郁子>

8月終戦記念日向け (2022.1)

<朝日昇>

米朝首脳会談の成功を祈る (2018.6)

仕事の苦い思い出 (2019.5)

<市原佐紀>

ヨーロッパ・デンマークから見た戦争と平和 (2015.1)

<市原秀美>

デンマークで感じたこと (2014.11)

藤崎崇明さんのこと (2015.4)

NYでの一週間 (2015.6)

高島 仟氏を偲ぶ (2017.6)

<上前昌子>

歴史から学び未来を構築しようとする国と… (2020.1)

<S>

私は1930年生まれ (2017.6)

<S.O>

ヒマラヤに抱かれた、やすらぎの国 ブータンへ (2016.10)

原水爆禁止2017年世界大会長崎(8月7日~9日)に参加して (2017.9)

<S.K>

年寄りのぼやき (2020.6)

<N.N>

お金の話 ~ 日々のニュースから思うこと (2020.11) 原稿、見当たらず

私たちにその覚悟はあるか? (2023.1)

<F.S>

初めてネパールを旅して (2016.12)

<M.H>

「平和ボケ」という国民批判について (2015.4)

私を変えた人 — 高校生の時の出会い — (2015.11)

夫婦別姓に関する最高裁判決について思うこと (2016.1)

虚仮こけにされたアベちゃん — 「日朝首脳会談」に喝! (2017.1)

<M.K>

映画「風に立つライオン」を観て (2015.5)

<O生>

高島仟さんを偲ぶ会(8月5日) (2017.9)  
<大西典子>  
4歳の戦災記(焼け残った雨戸で..) (2021.6)  
<大西慶雄>  
23.5.28 九条の会全国交流集会(報告)—大江健三郎さんの志を受け継いで— (2023.7)  
<小川幸四郎>  
「組織と個」について (2017.2)  
<樫野マロン>  
あの日、私はパリにいた (2017.2)  
子どもの声 (2017.3)  
<鹿島 学>  
M.Yさんのこと (2015.3)  
<角屋洋光>  
税制の歪みが社会保障を劣化させている (2017.11)  
新型コロナウイルスと社会保障 (2020.5)  
「自助、共助、公助」論のルーツをたどれば 自助論を乗り越えるために(1) (2020.10)  
50年勧告のモデルはベヴァリッジ報告 自助論を乗り越えるために(2) (2020.11)  
「自助、共助、公助」論は専制政治時代の遺物 自助論を乗り越えるために(3) (2020.12)  
<蒲田雅子>  
思い出の品 (2019.2)  
お兄ちゃんになった僕 (2019.6)  
友よりの絵はがき (2019.11)  
<狩場台の亀>  
行ってきました「あいちトリエンナーレ」 (2019.11)  
<川端泰子>  
神戸大空襲の記憶 (2015.1)  
<K子>  
素晴らしき人たちとの出会い (2015.1)  
戦争法廃止 2000万人署名運動 (2016.1)  
憲法カフェ 「緊急事態条項」を知っていますか (2016.7)  
<こづくえ・えつこ>  
安倍首相への手紙 (2015.10)  
「建国記念の日」について思う (2016.2)  
日帝(日本帝国主義)の象徴:アカシア in KOREA (2016.4)  
独立宣言からこぼれ落ちたアメリカ・インディアン① (2016.6)  
独立宣言からこぼれ落ちたアメリカ・インディアン② (2016.8)  
シベリアへの旅 (2017.8)

## 8月終戦記念日向け (2022.1)

青木 郁子 (北区鳴子)



敗戦の色濃くなった昭和20年の夏、女学校の寮から学徒動員で働いている工場へ急用を命じられて数人の級友と出かけた。

うだるような暑さの中少しでも涼しいように、川風の吹く近道の川原を黙々と歩いた。前の人と一定の距離を置いて。(これは空襲に遭った

時に全員が死なずに済むように訓練されたものであるが、今思えばはしゃぎ盛りの少女が友だちと歩くのに、縦一列に、しかも一定の間をおいてとは何ということであろうか。)その時突然空襲警報が鳴りそのサイレンが鳴りやまぬうちに不気味な爆音。米艦載機「グラマン戦闘機」の襲来であった。同時にバリッバリッと機銃掃射。

日頃の訓練通り私は夢中でその場に伏せた。川原には私たちの姿を隠してくれるものは何もない。白い川原には保護色として着ている黒っぽい服がかえって目立つ。その時も私はちょうど川の中にいた。日照りのため水かさは伏せた私の体を覆うのがやっとという浅さであったが、うつ伏せになったおなかに川水が冷たい。どれくらい時間が経ったろうか。

もとの静かな川原にかえったのを確かめてから両手を川底に突っぱり亀のように頭をもたげた。先頭を歩いていた友だちが私と同じように枝分かれした水流の中から身を起こし心配そうに後ろを見ている。と、私のすぐ前を歩いていた友だちが、水流と水流の間にできた三角州の上につつ伏せたまま動かない。思わず駆け寄った時、彼女の紺緞の上着の背中の真中からスウツと煙が上がって、その周りが茶色く焦げていた。即死である。不思議なことに、この時から私の記憶はプツツリと切れている。彼女の遺体をどうやって運んだのか。残った私たちはどうしたかのか。分からない。

「お前たちはほんとうに死ねるのか?!」

飛行機のエンジン部分のベアリングを製造していた私たちは、間もなく各々の機械の前で終戦の放送を聴いた。1年間1日も休むことなく動かし続けた旋盤にとりすがって泣いた。

「お前たちはほんとうに死ねるのか?! 米軍が上陸してくるのも時間の問題だ! その時はこうして死ぬんだ!」  
「かなだらいの中にぬるま湯を張って、手のひらを下にして手首まで入れる。よく切れる刃物で手首の動脈をはねる。そしたら眠るように死ねる。」

外は真っ青な夏空、蒸れたような草の匂いと暑さに拍車をかけるような蝉の声。寮の集会室で毎朝聴かされる先生の言葉であった。

長い髪を両方の耳の後ろで束ね、正座のモンペ姿が並ぶ。誰ひとりとしてこの先生の言葉を疑う者もなければ、そうやって死ぬことに何の抵抗も感じない16歳の少女たちは、先生の両眼に光るものがあることを見逃してはいなかった。

「今の子はむずかしい。」とよく言われる。しかし、どんなに聞き分けのない生徒と格闘する日々であっても、かわいい生徒に死ぬ方法を教えなければならなかった先生の胸の内を思えば、どれだけありがたいか分からない。先生に教わった方法を実行せずに生き延びることができ、教職に着き、退職した。

よき隣人や友人に囲まれ、健康と幸せをかみしめながら、どんなことがあっても、もう二度とあの時の先生の苦しみを繰り返してはならないとつくづく思う。

### 米朝首脳会談の成功を祈る（2018.6）

朝日 昇（竹の台）

4月27日南北朝鮮首脳会談が板門店で開催され、両首脳が朝鮮半島の非核化と朝鮮戦争の終結を年内に目指すという「板門店宣言」に合意したことは、画期的な出来事である。市民革命ともいべき大規模なキャンドルデモにより朴槿恵大統領を弾劾・訴追して、昨年5月の大統領選挙で文在寅氏が大統領に選出されたことから、今回の歴史的和解の扉が開いた。文大統領が架け橋となって、いよいよ米朝首脳会談が開催されようとしている。



昨年10月、北朝鮮の核ミサイル攻撃への恐怖をあおって「国難選挙」だと国民を騙し、総選挙に打って出て議席を掠め取った安倍政権の外交のまやかしが今くつきりと浮かび上がってきている。北朝鮮には「制裁と圧力」を掛けることで、北朝鮮に非核化を迫るという日本外交の戦略のなさが、大破綻を示している。

私は日本人として朝鮮の人たちに歴史的謝罪をきちんと表明することが大切だと思う。なんとなれば日本は1910年朝鮮国を日本の植民地にして、1945年の敗戦まで35年間支配し続けてきたからである。また南北朝鮮が38度線で分断されたのは、大本営が本土決戦に備えて38度以北を関東軍が、以南を朝鮮軍が守備したことが大きく影響をしている。日本の敗北後北から侵攻してきたソ連が関東軍を、米朝が朝鮮軍を武装解除したため、38度線以北はソ連に、南は米朝の支配下に置かれることになり、戦後米ソの思惑で北が金日成率いる朝鮮民主主義人民共和国として、南は李承晩率いる大韓民国として分断されたまま、1948年それぞれ独立したのである。南北朝鮮の分断の元々の原因は日本による朝鮮の植民地支配にある。

日本政府は盛んに北朝鮮による拉致被害者の開放が最重要課題と主張している。日本軍国主義が日本内地へ多数の朝鮮人労働者を強制連行してきた等の植民地支配に対する真摯な謝罪がなければ、真の拉致問題の解決には至らないのではないかと思う。分断国家をもたらした責任を持つ日本政府の立ち位置は、植民地支配に対する誠意ある謝罪と賠償を果たし、拉致被害者の開放には日朝首脳会談を開催して、友好条約を締結するよう外交交渉をしていくことである。そして私たち日本国民の緊急の課題は、内政でも外交でも破綻した安倍政権を一刻でも早く打倒していくことであると思う。

## 仕事の苦い思い出 (2019.5)

朝日 昇(竹の台)

最近、俳優織田裕二が出演する通販型の損保会社のCMで、颯爽と背広を着て交通事故の示談交渉に出かける映像が流されています。「事故解決のプロフェッショナルによる対応」をアピールして、加入を呼び掛けています。損保会社にとって自動車保険は最大の稼ぎ頭で、その自動車保険の最大のセールスポイントが事故解決サービスです。しかしこの仕事はそんなにカッコイイ仕事ではなく、極めて泥臭く過酷な仕事です。私は、損保会社就職中の大半を示談交渉業務に従事してきました。



この仕事でいまだに心の中に残っている事案があります。20 数年前の現職の時に対応した事案です。事故はスピードの出しすぎで交差点の中央分離帯に乗り上げた単独事故でした。被害者は車の助手席にいた同乗者で、顔面をフロントガラスにぶつけ、顔面の負傷がひどかったようでした。被害者は 20 歳代前半で自分の顔貌に自信を喪失して、形成外科での手術を何度も繰り返していました。

私が事案を引き継いだのは事故から4~5年経過した頃でした。被害者は、福島県のいわき市の実家におり、当時私は横浜から、被害者に面談するためにいわき市まで出かけて行きました。家の中に通され被害者の母親に挨拶をして、被害者の顔を見ると想像していた醜状も気にならないほどの顔付でした。刺身などの食べ物が用意されており、被害者は私に割りばしを割って置くという気遣いをしてくれました。彼が私のそばに来た時強烈な薬のにおいがして、これは強い精神安定剤を服用しているな、と直感しました。母親に事故から長期間経過しているので、このあたりで治療を打ち切り「症状固定」をして、後遺障害の認定の手続きに進みたいと提案しましたら、母親は涙を流して早く解決して下さいと懇願されました。

この事案は、前任の担当者が被害者の実情を長期間把握しようとせず、毎月被害者からの内払請求を支払い続け放置してしまったことが、結果的に被害者及び家族を苦しめることになっていたのです。私はすぐに被害者から提出された顔面醜状の後遺症診断書を自賠償調査事務所に出し、後遺障害の認定を得ることが出来ました。

結果を母親に連絡すると、今後は弁護士を通じて交渉をしたいといわれたので、連絡を待ちました。しばらくして相手弁護士から、被害者が縊死したとの知らせが入ってきて、想定外の事でビックリ。自賠償で事故と自殺との因果関係が認められて、その後示談交渉は円満に進み解決をしました。しかし極めて後味悪く、損保の人間としてはもう少し前から被害者に寄り添い、何らかの手を差し伸べていれば、と後悔の残る事案でした。

## ヨーロッパ・デンマークから見た戦争と平和（2015.1）

市原 佐紀（デンマーク・オールボー大学 社会政治学博士）

日本では子どもによく、「知らない人に名前や住んでいる所を教えちゃだめよ。」と教えますが、私が住んでいるデンマークでそのような話は聞いたことがありません。北欧諸国はお互いの信頼度が社会全体に高く、それが福祉国家の構築や持続など多方面に良い影響を及ぼしているとする研究もあります。他人を信頼できるということは、犯罪率の低さにも繋がっています。北欧では赤ん坊が寝ている乳母車をお店の外に置いて買い物をする風景がごく普通に見られますが、これをデンマーク人の親がニューヨークでしてしまい、幼児虐待で逮捕されてしまうということもありました。日本は世界有数の低犯罪率の国ですが、他人への信頼感というと昨今危うくなっているのではないのでしょうか。



このように日常は平穏な北欧の国デンマークですが、軍隊・戦争・テロは日本よりも身近に感じられると言ってよいでしょう。徴兵制度は、冷戦後欧州諸国で廃止される傾向にありますが、デンマーク・ノルウェー・フィンランド・スイスや東欧の数力国などで今でも行われています。中でもノルウェーは2013年に徴兵制を女性にも拡大させました。デンマークの場合、18歳以上の健康な男子が対象になりますが、実際兵役に就くかどうかはくじ引きで決まります。最近では90%以上が志願者で占められていて、くじで選ばれる数は減っています。そして、軍事訓練ではなく救助訓練や開発途上国の支援事業に従事したり、良心的兵役拒否として代わりに4ヶ月から1年のボランティア活動を選択することもできます。私は、徴兵制が未だに欧州の数力国で支持されているのは、一般市民が実際に徴兵され戦わなければならない事態が、現実的に感じられていないことが大きいと考えています。徴兵制は基本的に国民の責任や慈善といった良心的なものを象徴するもので、殺戮といった負のものからは切り離されているのです。

ヨーロッパは近頃、欧州連合(EU)が東欧にも拡大して28か国になり、一つの統治システムとして考えられがちですが、各国ともお国事情は様々で、連合側と加盟国側の利害の調整が常に課題となっています。特に軍事面では、統一はまだまだ進んでいません。EU条約では、国連で認められている集団的自衛権が加盟国間で行使されると示していて、共通安全保障・防衛政策(Common Security and Defense Policy: CSDP)も打ち立てられています。このような共通政策の下、リビア内戦後の国境管理や今年2014年のウクライナ内戦におけるロシアの有力な資産家への経済制裁などが行われています。しかし、実際の軍事行動・参戦は、EUとしてではなく、全加盟国中22か国が属する北大西洋条約機構(NATO)の枠組で行われています。歴史的に戦争に対する姿勢が違う国が混在するヨーロッパでは、各国の自治権を越えた共通の政策は非常に難しいのです。オーストリアや、最近曖昧になっているもののスウェーデンは中立を謳って来ましたが、イギリスはアメリカと常に行動を共にする関係にあります。ドイツやフランスは最先端の軍備を持つNATOの加盟国ですが、必ずしもアメリカと協調するわけではありません。2003年のイラク戦争の際は両国とも参戦しませんでしたし、最近のイスラム国攻撃にはドイツは参加していません。

あまり日本では取り上げられない小国のデンマークは、1949年にNATOに加盟しましたが、新冷戦期に入った80年代の社民党政権下では、ソビエト圏に対するNATOの抑圧政策に国内で同意を得ることができず、加盟国でありながら、距離を置いた存在にありました。しかし、2001年から10年続いた自由党政権で7年間首相を務めたアナス・フォー・ラスムセン(2009年から2014年9月までNATOの事務総長)の下、ブッシュ政権アメリカとの協調路線が進められました。9.11後の対テロ戦争(War on Terror)では、アフガニスタン侵攻を始め、2003年には、野党の反対を与党と右翼のデンマーク国民党が僅差で押切り、イラク戦争にも当初から参戦しました。以来、反カダフィ政権への軍事協力、シリアからのイスラム国空爆など、アメリカ主導の戦争に次々と参加しています。コペンハーゲン大学の国際政治学者オーレ・ウェーバー教授は、第二次世界大戦中はナチスに無血降伏し、戦後も英雄的な行為がとれなかったデンマークでは、正しい側につき戦わなくてはならないという倫理意識が国民一般に強いと言います。80年代のNATOに非協力的な態度は、今日むしろ恥じるべき歴史としてとらえられ、以前は反戦志向だった中道・左翼政党も翻り、現在ははっきり反戦を打ち出しているのは最左翼の党のみです。結果、綿密な議論もないままに全会一致に近い状態で戦争する国になっていて、この状態を教授は「北朝鮮化」だと危険視しています。

デンマークは、世界でも民主主義が最も進んでいる国のひとつといっても過言ではありません。選挙投票率も常に80%を超え、国民の政治参加意識も老若男女非常に高いものです。2005年に起こったムハンマド風刺漫画掲載問題も、デンマーク人にはごく当たり前の言論の自由とイスラム教徒の価値観、そしてその他の利害関係が織り交ざり発展したものともいえます。しかし、近頃の傾向には、国民レベルの議論もないまま他国の戦争に簡単に参加できてしまう怖さを感じます。そこには戦争が「紛争解決」や「民主化」のために必要なものとされ、自分達は「正義」の側で、タリバ

ンのように女性を虐げる相手国の独裁者達は「悪」だとする設定が根底にあります。この正・悪を白黒はっきりつけてしまうところが、今日のアメリカを中心とする西側陣営と反西側陣営との対立に見えます。世界にはこの対立構造に異なった観点を加える陣営が必要です。日本の「戦争をしない」という精神は、正・悪などはっきりつけられないからこそ、大切なものだと思います。安倍首相が掲げる憲法改正は、この精神を国際社会で必要だといった言い回しですり替えています。国際社会はアメリカ・ヨーロッパのみで作られているのではないということも考えなければなりません。

(市原さんの実家は竹の台で、この冬休暇で実家に帰っておられます。編集者)

### デンマークで感じたこと (2014.11)

市原秀美 (竹の台)

8月末から3週間ほど娘のいるデンマークに行ってきました。これで5回目になるので新しい感動はないと思ってましたが、孫が6歳で0学年の小学校に入ったのと、娘の大学へ行く機会があり、益々暗くなる日本の状況との違いに黙っておれなくなりました。



気温は10°~23°でカラッとした秋晴れが続いていました。日本人の家族があちらにいくとアトピーや花粉症が治ると聞いていましたが、成程あちらでは体調が良く、帰国後は鼻がグスグス体もムズ痒く中国の影響もあるとは思われますが、山紫水明の昔の日本ではなくなっているようです。彼の国は山がなく氷河でできた地形は砂地で決して土壌が良いわけではありません。地下水を守るために農薬を使わない有機農業が発達し、食料自給率300%で他国へ輸出するぐらい。有機の食料の方が溢れ、値段は日本の1/2、野菜など1kg300円も出せば十分手に入ります。

人件費が高いので(最低賃金約2000円)観光で来る人には高いばかりが目につき、北欧と言えば「税金が高いんでしょ？」と二言目には言われますが、収入が約2倍あり、教育費や医療費が無料であればその半分の税金を払っても十分暮らしていけ、将来不安でお金を貯める必要もなく循環型社会なのです。娘の家に遊びにきた20代の若者が「この間、腎臓移植をして会社を休んでいた。」とサラリと言ったのには驚きました。手術に何千万かかっても無料で何の心配もいらぬのです。「どうしてそんなにお金があるの？」とよく聞かれます。貧富の差を作らず中間層を厚くすれば日本だってもっといい社会が作れるはず。安倍首相の所信表明のように「世界一企業が働きやすい社会を作る」のが本当に私たちの幸せにつながるのでしょうか？。

農業国で先端産業が遅れているかというそうではなく、医療・風車・コンテナ・レゴ・デザインなど世界一を誇るものは沢山あり、コンピューターなどどの家庭も普及し、学校の連絡はすべてコン



コンピューターで、登下校も校舎内のパネルで知らせ、登録をしていない人が迎えに来るとひと悶着あるようです。日本の教育費の支出はOECDでは最下位。あちらの小学校の各教室には冷蔵庫、IHクッキング設備、電子レンジは元より、洗濯機、食器洗い機までが備え付けられており、25人以下学級、担任+学童の先生が無数。朝の6時半～5時までは学童の先生が待機してくれています。

街には若者と赤ん坊で溢れ、活気があります。一人子どもがいると、税抜きで夫婦が20万円ずつ計40万円程度、働いても働かなくてももらえ、子どもに手厚いしあわせの国です。

帰国すると長田の事件でもちきりで、対策として地域の「見守り隊」が召集されたようですが、家族が3時半もすれば迎えにこれるような彼の国の働き方がモデルとならないのが残念でなりません。

藤崎崇明さんのこと (2015.4)

市原 秀美 (竹の台)

草の根の 活動支えしジェントルマン 平成の足長おじさん 藤崎氏逝く

これは私たち「西神ニュータウン9条の会」の会員 Mさんが、3月3日『お雛祭りの日』に藤崎さんの訃報を聞き、即興で詠んだ歌です。

この歌の通り藤崎さんは、いつも穏やかで笑みをたたえ、シルクハットではなかったけれど、グレーの帽子と背広のよく似合う美男子のジェントルマンで、そのシルエットと行動は足長おじさんそのものでした。戦争を嫌い、平和への情熱は誰よりも強く、「改憲論者」と議論する時は「口角沫を飛ばす」勢いでした。



8年前「平和であれば何でもできる」と会員の得意分野、旅行・音楽・文学などありとあらゆることを語ることから始めた「9条の会」でしたが、ソフィア大学で学ばれた藤崎さんの「ブルガリア滞在記」は秀逸で、ブルガリアヨーグルトと琴欧洲ぐらいしか知らなかった私たちの目を開いてくれました。「いつか藤崎さんに案内してもらってブルガリアへ行く」のが私たちの夢でした。曲りなりにも私たちが活動が続けてこられたのは太っ腹の藤崎さんがいて、そのそばにはもっと太っ腹のやさしい奥様がしっかり支えてくださったからにほかなりません

6年前、豪邸の藤崎邸の見学よろしく20名以上が押しかけ、暖かい奥様のおもてなしを受け、藤崎さん所有の「映像で語るわたしたちの日本国憲法」のDVDを見、その後全30巻を3年かけて鑑賞し終えることができました。このビデオは貸し出され他の多くの「9条の会」に引き継がれていま

す。20年間病魔と闘いながら、お元気な時は一緒に高校前でビラまきや、各戸配布、『平和ミュージアム』や舞洲での『世界大会』バス旅行など思い出はつきません。私の家には読書家の藤崎さんから頂いた「藤崎文庫」があり、みなさん利用されています

お子様はいらっしゃらなかったけれど「子どもたちのしあわせ」のために尽くされた「平成の足長おじさん」は3月3日のお雛祭りの日に相応しい門出をなさいました。きっと天国で子どもたちに囲まれ笑顔でご家族や私たちを見守ってくださっているとと思います。ノーベル平和賞にもノミネートされた平和憲法9条を守る闘いはこれからも続きます。まだまだ教えていただきたいことが沢山あり残念でたまりませんが、私たちは藤崎さんの熱い思いをうけついで頑張っけてゆく決意をしています。藤崎さん本当に長いあいだありがとうございました。

2015年3月5日「西神ニュータウン9条の会」

(本稿は、藤崎さんの葬儀の際によませていただいた弔辞に少し書き加えたものです)

NYでの一週間 (2015.6)

市原秀美 (竹の台)

美術館とブロードウエーのショーを見に行こう」と軽く9条の会の0さんと NPT(核不拡散条約)再検討会議(4.27~5.22)・ニューヨーク行動日本原水協代表団(1058人/4.25~5.1)に加わった。



一行はすごく真面目!!! 深夜にセントラルパーク近くのホリディ・インに到着し殆ど寝ていないのに毎朝9時には集まってグループでマンハッタンのアチコチで国際署名行動。初日昼から中央付近にあるユニオンスクエアで集会があるのでそこまで南下しがてら“No Nukes!””No War!”と言いながら主にバス待ちの人にサインをしてもらう。ずっと好天に恵まれ街路樹の梨の白い花が満開で美しい。

広場の舞台では各国からの代表がスピーチ。丁度ネパールの大地震で赤いバケツにカンパの訴えがあり、色とりどりの衣装や横断幕、宗教家の叩く鐘や太鼓の音など華やかで、国連近くまでパレードした時には1万人に膨れ上がり、TVの撮影もやってきて、沿道の人々への反核グッズやチラシまきの宣伝は中々のものであった。

国連の広場には633万余りの署名が積み上げられ、国連総長や会議の議長や189名の代表(この中で核を持つ米・英・仏・ロ・中5カ国が問題児)が口々に「これらの署名の民意に応えるべきだ」と絶賛し、今回初めて期限を切った「核兵器禁止条約」の草案が出されたと聞き、署名の威力を実感した。私も調子に乗って、終わりの頃はセントラルパーク前でスピーチデビューまでしていた。



あくる日はジョン・レノンが射殺されたダコタハウス近くの会場で女性の交流集会や国際会議があり、改装中のハウスを見学しがてら前のセントラルパークで署名行動。それらの合間に国連見学や知人との再会、メッツ(メトロポリタン美術館)の見学をした。メッツのシニア料金は平均17ドルだそうだが、「いくらでも結構です」というので10ドル払った。それでも1200円だ。円安のせいもあるが、物価の高いのには皆悲鳴を

あげていた。地下鉄(メトロ)でも300円、4人で乗るとタクシーの方が安いのでよく利用した。その運転手がネパール、インド、イスラエル、中東とみな出身が違う人種のルツボ。一様に生活苦を嘆いていた。

黒人の変死で首都近くのボルティモアで暴動が起きていたが、それに呼応してNYでも夜間にユニオンスクエアやブロードウェイでデモをし一行の中にはビデオ撮影をしてきた人もいた。真面目なデモだが、必ず跳ね上がる若者が居る。一色触発の超格差社会だ。五番街42丁目には超高級店が立ち並ぶ。「折角来たのに満席でお茶が飲めなかったわ(これはホント!)とトイレだけ借りて、ペニンシュラホテルのコンシェルジュに言って出た。

渡辺謙が主演を務める「王様と私」は満席でボックス席が4万円だと仲間が言った。タイムズスクエアで当日券が半額の「ドクトル・ジバゴ」を手に入れ観た。不評だそうだが、十分見応えがあった。あれだけショーがひしめく中でトニー賞に「王様と私」がノミネートされているというのは、Ken Watanabe はよく頑張っていると思う。

民間の日本人はよく頑張っているのに、日本政府はよくない。同時期に渡米していた安倍首相は現地の新聞 USA TODAY によると、上下院合同議会でスピーチし、「まず最初に先の大戦で亡くなった米軍人への日本軍の蛮行を永久に詫び、日本が攻撃されていないのに、危機下にある米軍を武器を持った日本軍が助けに来る米日新 ガイドラインを結んで好評」と書かれ、国連では被爆者がスピーチし、被爆の展示もやっているというのに、「広島・長崎」も言わず、現れず、憲法無視の”Abe, No, Thank You!”だ。

これでもかと高く高くそびえる摩天楼の中でもエンパイアステイトビルは健在だ。私たちは美しいこの建物をランドマークに歩いた。9.11のツインタワーが崩れたようにやがてはこの虚栄の市アメリカも崩壊する日が来るだろう。その時に日本が尖兵だけにはなりたくないものだ。老骨に鞭打つての参加だったが、実りの多い一週間だった。

高島 仟氏を偲ぶ (2017.6)

ひとりの友人

市原 秀美

プレんティを歩いていたら、向こうから「やあ！」と笑顔で手を振ってトレードマークの帽子とトレンチコートを着た高島仟(しげり)さん(愛称千さん)がやって来る気がする。5月3日の憲法記念日の集会以来姿を見せなくなった千さんに胸キュンである。千さんの知り合いの何千何万の人々が「千さんロス」に胸を痛めていると想像する。ましてや「あ・うん」のおしどり夫婦の照子さんの悲しみはいかばかりかと察する。



西神ニュータウン9条の会会長の高島仟氏が2017年5月15日に逝去されました。

「千さんは若い頃モテたのよ！」と元同僚の女性から聞いたことがある。モテるのは若さだけではない。アフリカでは老人は「図書館の値打ちがある」とモテはやされるそうだが、まさに千さんは私たちにとって「生き字引」の何でもゴザレの存在だった。若い頃は演劇や音楽、文学に親しみ、同人誌におそらくは「照子さんモデル」の詩や文を発表した。関学ではテニスプレーヤーとして名を馳せた。情熱の人は闘士でもあった。私が千さんと知り合ったのは、もう30年以上前。神戸市交通労組の委員長として出てこられていた、現在の兵庫労連の前身、統一労組懇の組合であった。ご近所で、娘と千さんの次男が同級生で親しく出入りさせてもらった。というより誰でもウエルカムの高島邸で、9条の会もお世話になったが、一日中人の出入りが絶えなかった。あの忙しい中で、本を読み、文を書き、闘いの先頭に立つなどどうしてできたのか今もって謎である。

千さんは交通局をやめられてから、ベルリンの壁崩壊直後、彼を父と慕う指揮者の抜井厚氏の居るウィーンに居を構え、半年ごとに行ったり来たりした。ウィーンでの千さんが、好きな骨董品集めに勤しむ事が出来たのも、西神でデンと構えてくれる照子さんがいたからである。1年後の夏休みに娘と訪ねたが、もうその頃には娘さんも息子さんも呼び寄せ、千さんを囲む大きな人々の輪ができていた。言葉が出来なくてもどこでも出かけ世界中に友人を作る平和の伝道師のような人であった。まだ1年というのにウィーンはもとよりヨーロッパの歴史・文化に精通しておられ、ウィーン大学の日本語学科やオペラ、美術館、ハップスブルグ家の遺構、モーツアルト、ゲーテ、解放されたばかりのチェコやハンガリー等東欧諸国への珍道中など思い出は尽きない。お酒の飲めない千さんがホイリゲで「オーストリアのワインは最高！」と言っていたが、私もあのクロイスターノイブルク修道院での赤ワインは「人生最高のワイン！」と忘れられない。

かくして12年前の「西神ニュータウン9条の会」の呼びかけ人の一人になってもらったが、まだ私たちによく知られてなかったオーストリアの様子(永世中立国であり、NATO 軍の飛行機が国の上空を飛ぶことを許さない、16歳選挙権、EU 諸国の多くがそうであるように、大学まで無償化で学

生は8万円程度の生活費が出ている、年休取得は続けて3週間以上取らねばならぬ、原発 NO!で「核兵器禁止条約」作成にも主導的役割果たしている。それもこれもナチス占領の反省から等(など)を語ってくれた。「藤崎さんにはブルガリアを、高島さんにはクロアチアなどを案内してもらおう」と9条の会では夢見ていたのに、安倍政権に翻弄されている間にいずれも果たせなくなってしまった。

最近の千さんは年齢が84歳という高齢を意識してか、大阪・京都と東奔西走し自ら学び情報を発信し聞きしに勝るものがあった。文化はもとよりであるが、政治的にも市民が中を取り持ち野党共闘で幅広い住民の広がりがなく「戦前の過ちを繰り返す」と会うたびに「みんなもっと勉強しないと！」と口を酸っぱくして言っておられた。私たちが高島さんの無限の知識を「今のうちにしっかり受け継いでおかないと」と話し合っていたところであった。千さんの蒔いた種は千にも万にも茂り世界中に散らばっている。彼の遺志を私たち一人ひとりが受け継ぎ、「平和で文化的な世」を築きたいと誓う。合掌。

歴史から学び未来を構築しようとする国と  
歴史を修正し都合よく未来を変えようとする国  
(韓国と日本の関係悪化について想うこと)

上前昌子 (垂水区)

私は2011年福島原発が爆発した後、住んでいた郡山から子ども二人と一緒に台湾に母子避難をした母親です。5年半の月日を台湾で暮らしました。

台湾からは東アジアがよく見えます。何よりも、日本の政治のおかしさ、日本社会のおかしさがより鮮明にみえてくるのです。

台湾に住んでいて気付いたのは圧倒的に日本の若者が過去の歴史について知らない、関心がないという事です。それは若者の問題ではなくその世代を育てた世代に問題があるということに行き着きます。



韓国との徴用工の問題、慰安婦の件、そもそも植民地支配とは？何だったのか

あまりにも知られていない。この国は過去にどのような加害を他国に与えたのかを知らない上に最近ではその加害の歴史を修正したい人間たちが権力を持ち大手を振ってメディアでも発言し教育の中でも若い世代に語るようになっていく事に恐怖を感じます。

そして最近の韓国との関係悪化についてそれなりに社会運動に関わっている人でさえも「韓国側も妥協して歩み寄らないと解決できない」という論調または「いつまでも過去をほじくり返し

でも意味がない」「いつまで謝罪しないとイケないのだ反省はしたろう」という発言には愕然とさせられます。

【韓日関係の障害物は過去の歴史それ自体ではなく、歴史問題に対する日本政府の認識の如何にあるからです。】

これはいつだったかの演説でムンジェイン大統領が話した言葉です。

以前から加害の歴史をどれだけ日本は教育や社会の中或いは家庭の中で語ってきたらうか？平和教育と言いながら中身は空襲で怖かった、空腹で辛かったなど被害の歴史が主であったのではないだろうかと思っていました。

加害について蓋をし続ける日本政府、蓋をあげようと努力しない民衆の多く。

台湾では転型正義というものがよく叫ばれます。権威主義的統治から民主主義に移行した社会が、過去に行われた人権侵害に対して責任者の処罰や被害者の名誉回復・補償をしたり、旧時代から続く不公正や、弊害を抱えた制度を正して、公平と正義を実現することを指すものです。また韓国の植民地資料館には外的要因だけでなく内的要因を明らかにし 内から反省し省察することが大事だという記述が展示されています。

日本の侵略植民地支配が根本原因ですが、それに朝鮮人がどのように加担したのかは、内なる加害的な事で韓国でも長い期間タブー視されていた事です。

日本がしっかり加害の歴史を修正改ざんすることなく学ぶ事抜きに、未来の平和はないと思います。いつまでも日本政府の蓋をしておきたい人間たちに迎合している場合ではないでしょう。今、日本という国は思考停止した多くの人を乗せたブレーキの壊れた暴走列車状態です。スピードを加速させながら右へ右へと曲がり暴走しています。その行き着く先に連れて行かれないために何をしなければならないのかが早急に問われていると感じています。

私は1930年生まれ (2017.6)  
S (竹の台)

私は1930年生まれ、今年87歳になりました。1945年に終戦でしたから、全く軍国主義の真只中で育ちました。女学校に通っていましたが、勉強は全くなく、「防空壕掘り」「野菜作り」「松根油作り」等の日課でした。空襲警報のサイレンが鳴ると、急いで帰宅するのです。自転車通学でしたから、明石公園の中を通り抜けてやっと市街地を出た頃には B29(アメリカの爆撃機)が頭上を通り越して爆弾を落として行くのです。生きた心地はしません。「同じ死ぬんだったら、家族と一緒に死にたい」と思ったことが何度もありました。



夜は9時ごろから一機ずつ明け方まで焼夷弾を落とし続けるのです。それでも翌朝又自転車で学校へ行きました。明石の町は焼け野原です。同級生も何人か犠牲になっていました。やっと夏休みになり、家の手伝いをしていた1945年8月15日お昼の放送がラジオから流れました。「無条件降伏」「ああ戦争は負けたんや」「戦争は終わったんや」「やれやれもう怖い爆撃はないのや」「うれしい」と言い合いました。

二学期がはじまって教科書が回収され、工場になっていた校舎には机が入り、運動場の芋畑はローラーが入って改修されました。

何とか授業は始まりましたが、教科書は墨を塗ったもの、新聞の切り抜きなどで討論が重視されました。

焼け野原の街、住む家はない、食べ物はない、治安はとても悪い。

広島と長崎に落とされた新型爆弾(原爆)で、人も建物も溶けてしまった。こんな悲劇の戦争に反対する人はいなかったのかと言う意見がよく聞かれました。

思い返してみれば「一億一心」「うちてしまん」「ほしがりません勝つまでは」とかよく叫びました。違った意見を言うと「お上にたてつくことはけしからん」と特高警察によって牢につながれました。『非国民』と呼ばれ、近所や友だちからも怖がられ、ひどい差別を受けました。小学校は国民学校と改名され教育勅語やご真影を納めた奉安殿に登下校の際、最敬礼をしてから教室に入りました。徹底した軍国主義教育がされ、教育内容も「ススメ、ススメ、ハイタイススメ」「死んでも口からラッパを話しませんでした」「日本海開戦」など今でも覚えています。

こんな状態になったのは、明治憲法、治安維持法等によるものでしょう。今又そのような方向に進めようとしているのが共謀罪や改憲です。

又たくさんの命を奪い、たくさんの財産を失ってしまうのでしょうか。

ヒマラヤに抱かれた、やすらぎの国 ブータンへ (2016.10)

S. O (檜野台)

長年のあこがれの国へ やつとこの夏、行ってきました。

チベット仏教国で人々は素朴で美しい国です。寺院や王宮等の見学、小学校を訪問(文房具やおみやげを持って)。子どもたちの歓迎の歌と踊り(少し色は黒いが日本人に似ている)など楽しいひと時を持ちました。



珍獣のターキンを見に行ったり、美しい民家の数々(すばらしい木造建て等はおとぎの国みたいでした)。

最後にチベット仏教圏屈指の聖地で標高3000m級の崖に建つタクツァン僧院に登った時は疲労困憊でした。

むくげの花が沢山咲いていました。しゃくなげも八重があったり、種類も沢山あるそうです。ホテルの庭にいろんな花が咲いていて、珍しいバゴニヤは八重で大きくてバラの花のようなピンク、赤ときれいでした。

今年は日本と国交30周年の年だそうです。(以下、撮影はS.O)



原水爆禁止2017年世界大会長崎(8月7日~9日)に参加して(2017.9)

S. O (檜野台)



被爆者長年の悲願である国連『核兵器禁止条約』が(国連加盟国の2/3=122カ国の賛成で)採択されたのに唯一被爆国の我が国の首相が批准しないのは？



被爆者の72年は人々に何をもたらしたか？

歴史を作るのは市民。中でも印象に残った言葉は「パワフルだがパーフェクトではない」これは、主催者代表の安斎育郎さんが — 被爆 72 年の 72 という数字は2の3乗×3の2乗=72 で「パワフルだが(一つの数字の乗ではなく)パーフェクトではない」アキレス数と呼ばれる数字だ。これは禁止条約にも言える。122カ国が賛成しパワフルだが、賛成しない核保有国とその傘下の国がありパーフェクトではない。それを認識し禁止条約の調印国を広げ廃絶を目指そう」 — と言われた中の言葉。

分科会で遺構めぐりに参加。原爆投下中心地碑—浦上天主堂—平和公園—原爆資料館と2時間余り暑い中を歩き回って大変でした。『長崎の鐘』でお馴染みの永井隆博士は骨髄性白血病のかたわら終の棲家『如己堂』で17冊の本を書かれたそうです。博士の生涯と功績を知るにつけ感動に絶えません。

今も世界の何処かで絶えない戦争、何があっても戦争はあってはならないと強く願います。

年寄りのぼやき (2020.6)

S・K (春日台)

とうとう、高校野球夏の甲子園大会も中止になりました。残念でたまりません。

5月25日には、緊急事態宣言も全て解除されましたが、多くの深刻な被害を残しています。今後どうなるのか、不安は拭えません。

昨年12月、中国武漢市で発生し猛威をふるった新型コロナウイルス感染防止に何ら対策を講じなかった政府も、1月の観光クルーズ船でのコロナウイルス集団感染発生に直面し、日本国内へのウイルス持ち込みを防ぐ活動を初めて実施しました。時すでにおそく、東京都内でウイルス感染発症者が多発し出すと、安倍首相は、迅速に防止対策を打ち出さず、己の政策を進めるのに役立つ緊急事態対処法という強権発動を容易とする法案を成立させました。



また、コロナ騒動のドサクサにまぎれて、己を守ってくれる黒川検事長の定年延長を強行しました。そして、肝腎なコロナ感染拡大防止対応策は「クラスターつぶし」で事足りるとし、ウィルス感染を確認するPCR検査の実施を少なく抑えました。「37・5℃以上の高熱が4日間続くこと」という悪基準です。このため、感染者の重症化や死亡に至る人を救えなかった上、感染者の野放しとなり感染拡大に利してしまっただけです。PCR検査の実施を抑えたのは、夏のオリンピックをどうしても実施したい安倍首相が、東京都とつるんでコロナ感染者数を少なく見せるためと思っています。その上、日本の感染症防止の予算は削られ、医療体制は縮小していつてるそうです。医療従事者、PCR検査や人工呼吸器等の機器、医療用マスクや防護服等全て不足し、しかもほとんどが輸入にたよる状況で、緊急時の調達も出来ません。GDP世界3位を誇る経済大国日本が、こんなにも人の命を粗末にしているとは、なさけない限りです。黒川さんの賭けマージャンが発覚し、安倍ちゃんかもくろんだ検察権力の私物化は潰れました。司法権の独立が守られたことはほんとうによかったですね。

お金の話 ~ 日々のニュースから思うこと (2020.11)

N.N

原稿、見当たらず

私たちにその覚悟はあるか? (2023.1)

N. N (学園都市)

私は2年半ほど前から多文化共生を謳ったNPO法人でボランティアとして活動している。在日外国人に日本語教室を運営している組織である。私が関わっているのはこうべ子どもニコニコ会といって海外から日本へやってきた子供たちの日本語習得と学校の学習を支援するものである。放課後の2時間で週2回教室が開かれる。各国の子どもたちには教育委員会から派遣された教師から日本語の授業を個別に受けるが時間も期間も限られている。小学校とも連携してその受け皿の役割を担う。各家庭ではほとんど母国語会話であるため圧倒的に日本語の語彙が不足しており語彙の不足は学習や社会生活では大きなハンディとなる。「親の都合で急に分からないところに放り出されて子どもだって困るよね、子どもに罪はないのに。」というのは私を誘った友人である。彼女の夫はJICA職員で各国と日本を渡りながら子育てに奮闘した思いがある。学習支援には遠いがせめて子供たちの居場所づくりをと思う。



教室は東灘区の深江にある。なぜ深江かというと深江浜にはもともと神戸市東部中央市場があり、いまは缶詰工場、パン工場、弁当工場が集積する。そこで働くために多くの外国人が来日して住んでいる。国はペルー、ボリビア、ブラジル、パキスタン、ネパール、フィリピンなど。日本人がしない労働を担いその多くは夕方から夜明けまで働く。彼らはおおむね家族愛は強く親は勉強熱心である。

Chはペルーから来た4年生、来日して4年たつので友達もおりあまり不自由はない。読解力がないので計算はできても文章題で躓く。思考を重ねていく高学年になると難しいだろう。疲れが見え寝ることがあったので生活時間の見直しを求めたところ母親がぶちぎれたそうである。母親は生活力旺盛で食堂を営みスペイン語圏からの人の工場労働の斡旋(合法かどうか怪しいが)までしている。工場まで車で送迎するために帰宅は深夜となる。

Cnはネパール出身3年生。パパは英語ができるのでホテルマン。ママは日本になじめずうつ状態、日がな一日暗い中ではすわっているそうである。不規則勤務のパパとは連絡がとりにくくCnは休みがちである。Cnの話からすると母国では活発でよくできたようだ。日本に来た1年でわからないままにしているので多くが抜け落ちている。長くママと過ごす時間を思うと心が痛む。

Ncは来日2年だが活発で言われたことをするのは楽しくない、右向け右の日本の授業は苦痛である。好奇心旺盛なので伸びると思うが彼にとって書き順、トメやハネは愚の骨頂なのだ。細かいことを注意されて落ち込むことが多い。親の思いはあっても子どもたちの学力は思うようにはいかない。忙しい親は家庭学習をしてやれない。基本学習ができないまま社会に出ても困るであろう。日本での貧困が再生産されるだけである。いまや先進国では後進国からの労働力なしにはやっていけない。イギリスではブレグジットで、ヨーロッパではコロナで労働者が戻っておらず値上げの一因となっている。

日本は少子化による労働者不足を補うために外国人労働者を入れることに舵をきった。あくまでも経済の論理で決めた政策である。人権意識の薄い政府はきちんと議論し法整備はしたのだろうか。

翻って日本社会のわれわれはどうであろう。彼らの文化、価値観を受け容れ共生できるだろうか。だれもが幸福を追求するのは同じだが子育て、家族観、仕事に対する意識、全て違うのだ。上から目線で判断しようとしていないか。彼らを底辺の労働力と見るだけでは解決しない。彼らに限らず再生産されないよう貧困層にきちんと向き合っていく必要がある。

社会の私たちそれぞれにその覚悟はあるだろうか

初めてネパールを旅して (2016.12)

F.S (竹の台)

夫が昨年、ネパールに長期滞在しており、“一度は訪問を！！”と言われ、友人を誘って、9月末から10月初めにかけて行ってきました。9日間のうち、観光は、まず、飛行機でポカラに飛び、市内観光と1泊で軽いトレッキングに出向くことになっていました。しかし、私は最近、右足の調子が悪く、また、友人も膝の治療を続けている・・・という2人で、トレッキングには全く自信がありませんでした。



その上、当初、ポーターがつくはずが、無しとなり、もし、足の故障等がおこってもガイドは「背負うことはできない。」と言われ、1日目の登りは、タクシーで行くことになりました。無事、上に着いて、ダンプスという山間の地域を歩き、コスモスのきれいな山のロッジで1泊。次の日の下りは、荷物を半分ガイドに持ってもらって、無事下山でき、ほっとしました。

戻ったカトマンズでは、夫が定宿しているホテルを起点に、観光しましたが、ほとんどの寺院等が昨年の地震の影響で崩れている箇所があり、修復中でした。念願だったエベレストの遊覧飛行に出かけ、ばっちりエベレストと近辺の山々を見ることができ、感激でした。



今回の旅では、夫が日本語を教えている私立学校を見学し、出会った校長先生が「一緒に食事をしましょう！」との申し出で、泊まっているホテルの朝食会がありました。終了時、記念品まで下さり、感激・・・。

そして、最後の日の夜は、ネパールでの旅行社の方が(夏の3か月は日本の山小屋に出稼ぎに来ている)日本から戻ってきて、家に呼んでくれ、奥さんの手料理をいっぱい振舞ってくれました。

ネパールの方たちと短期間でしたが触れ合っただけで感じたことは、皆さんフレンドリーで、特に食事会では、ホテルに泊まっている人たちや、オーナーの親族の子どもたち等、いろんな人たちが一緒に食べるのです。昔の日本の農村地域のような感じで、今の日本が忘れてしまった“繋がりを大切に・・・”風習があることに、温かさを感じました。夫がネパールに惹かれる一端が分かったように感じた旅でした。

「平和ボケ」と言う国民批判について 私の平和シリーズ(1) (2015 . 4)

M. H (竹の台)

橋下徹大阪市長は以前、「日本人は長年平和が続いていることにより、自分の幸福しか考えないエゴ国民になり下がっている」という内容で、「平和ボケ」と言う言葉で日本国民を批判したことがあります。そして橋下氏に言わせれば、憲法で自国の平和だけを希求することが書かれており、それ故に自分本位の日本国民を増やしてきたのだから、日本国憲法、特に 9 条の条文を変えないといけないと主張するのです。



日本人が私利私欲で色々な犯罪を犯したり、自分本位に物事を考えて行動する若者が増えているという事実はあるでしょう。しかし自分本位で生きていくことは誰にも咎められることではありません。人に迷惑をかけないで、即ち憲法 13 条で言う「公共の福祉に反しない限り」、人が何に興味を持ち、どのような思想や信条また芸術文化を求めて行くかは各人の自由です。それに対して公の機関あるいは政治家からあれこれ指図される謂われはないのです。橋下氏はかつて日本が「政府の行為」で国民を悲惨な戦争に巻き込み、中国をはじめとするアジア諸国民を侵略した日本の歴史の事実を知らないか、または無視しているのでしょうか。

戦争による塗炭の苦しみの経験から戦後日本国憲法が制定され、日本国民はこの憲法に明記された平和国家の理念の実現を目指して努力してきたのではないのでしょうか。戦後 70 年間他国と戦争をしなかった世界に類例のない国—日本、そして「平和国家日本」実現に対する日本人の懸命な努力こそ評価されこそすれ、「日本人は平和ボケに陥っている」と言うおぞましい表現で、日本国民の歩んできた道筋を愚弄するとは何事ぞ!と怒りに震えてしまいます。

日本国民を挑発し、分断し、日本を再び「戦争できる国」に持っていくことが、橋下氏の真の狙いだと思います。平和を愛する日本国民の素直な気持ちを逆なでする橋下氏の妄言に対して、「平和が一番」と押し返していきましょう!

私を変えた人 — 高校生の時の出会い — (2015 . 11)

M. H (竹の台)

古稀を迎えた今、私の現在の思想や考え方に影響を与えたのは誰だったのかを、一度振り返っておく必要があると考えてみました。色々な人との出会いがありましたが、一番影響を受けたのは誰

かと自問してみますと、高校生の際に社会の見方を教えてもらったSさんの事が思い浮かびました。Sさんは、近所に住んでいた友達の兄さんで、家は母子家庭で貧しく、働きながら夜間高校を苦勞して卒業されました。



私は小さい時から心臓に疾患があったので、「自分は、体力勝負は出来ない。勉強で頑張るしかない」と考え、中学生時代には、「将来は、シュバイツァーや野口英雄のような医者になりたい」と夢に描いたものです。そのためには医学部を目指そう、と進路を決めていたのです。

しかし、入学した高校では受験勉強中心の授業が続いていました。入学後は精神的に落ち込み、数学や物理と言う理系の科目には手が出なくなっていました。それでも医者になる夢はなかなか諦めきれず、高校生活を悶々と送らざるを得ませんでした。

その時に話し相手になって下さったのがSさんでした。Sさんは、当時(1964年頃)某私大の大学生でした。

彼の家を夜な夜な訪ねて色々議論をして、徹夜で話したことも度々ありました。彼からは被差別部落の問題、戦時中に大勢の朝鮮人を強制連行して日本の炭鉱などで働かせていた事など初めて聞く話を教えてもらいました。今から考えますとまだまだ雑駁な知識の吸収だけに終始していたと思いますが、私自身にとっては「世の中の仕組みはそうなっているんだ!」、と言う新鮮な驚きで胸が高鳴っていたのを思い出します。

そして、彼から教わった社会の見方の中で一番大きく影響を受けたのは、「社会や歴史を根底から規定するのは、政治、思想、文化、芸術、宗教などではなく、物質的生産活動を司る経済構造である」と言う、世界観・歴史観でした。その影響を受けて、医学から経済学を勉強したいと、進路変更を決心したのです。

あの悶々としていた高校生活に押しつぶされずに自分を前向きに転換して、その後の人生の方向付けをしていけたのは、Sさんのお陰です。Sさんは、その後大学院を卒業されて、高校の先生になられたと噂で聞いています。詳しい消息は分かりませんが、生徒に慕われる素晴らしい先生になられたと思います。

夫婦別姓に関する最高裁判決について思うこと (2016 . 1)

M. H (竹の台)

12月16日に民法の夫婦同性規定に関わる最高裁判決が出ました。結婚した男女は同じ姓にすることを定めた民法750条は、憲法に違反しないと最高裁が判断しました。夫婦が同じ名字を名乗ることは社会に定着しており、合理性が認められるという理由です。選択的夫婦別姓を願っている人には、背を向けた判決になりました。

憲法 24 条第 1 項で「婚姻は、両性の合意のみに基づいて成立し、夫婦が同等の平等の権利を有することを基本」とし、更に第 2 項では「…法律は、個人の尊厳と両性の本質的平等に立脚して、制定されなければならない。」と書かれています。夫婦同姓で不利益を受けている人(自立した職業生活を送っていた女性が、結婚と同時に夫の姓を名乗らないといけない等)の事を最高裁は無視したと言えます。日本では 96%の夫婦が男性の姓を名乗っている現状があります。ただ、今回最高裁大法廷まで審理が行われ、5 人の裁判官が違憲の判断を下したことは、この問題を大きく前進させたと思います。私の世代では夫婦別姓など意識の中に無く、両性の平等と民法との整合性の是非について考えたことがありませんでした。まだまだ憲法が身についてはいなかったのかなあ、と思います。



憲法第 24 条の事で思い起すことが 2 つあります。一つは、家族生活における個人の尊厳・両性平等の条文を起草したのはベアテ・シロタさんという GHQ 民政局に所属して、22 歳の時に憲法草案作成に加わった女性のことです。彼女はピアニストの父親と一緒に来日し、5 歳から 15 歳まで日本で生活した体験がありました。戦前の日本女性の社会的身分が極端に低かったことを正すために、彼女の懸命な説得で条文化されたということが、後に明らかにされました。「ベアテの贈りもの」として映画化もされています。

もう一つは 92 歳になられた国際政治学者・畑田重夫さんの事です。彼は 20 歳の時に学徒動員され、多くの学友が戦死し、自身も軍隊生活で体をボロボロにされた体験から、戦後「憲法通りに生きる」を信条とされてきました。婚姻後の姓も平等に決めようと奥さんとじゃんけんをして、彼が負けて奥さんの姓にされたそうです。しかし、畑田さんも民法で夫婦別姓が認められていたら、どう決められたか興味のあるところですよ。

虚仮こけにされたアベちゃん - 「日口首脳会談」に喝！ (2017.1)  
M.H (竹の台)

12月におこなわれたアベちゃんとプーチン・ロシア大統領との日口首脳会談は、日本の思惑が全く外れ、ロシアの外交戦略に押し切られてしまいました。アベちゃんとしては、今回の首脳会談で北方領土4島一括返還は無理としても、もともと北海道の一部である歯舞・色丹の2島返還での合意は可能と思って会談に臨んだと思われます。しかし、プーチンから「日口2国間には



領土問題は存在しない」と会談前から釘を刺され、北方領土での共同経済活動での日本の協力を期待されたにすぎません。

しかし、ロシアの主張は不当なものです。第二次世界大戦の敗戦国・日本の戦後処理において、連合国は「領土不拡大」という原則に反して、千島列島を含む日本の北方領土を、米英がソ連の日本参戦の条件としてソ連領土にするとスターリンに約束した「ヤルタ秘密協定」の不当性があります。日本政府はこの不当性をロシアを含む世界にアピールして領土交渉に臨まなければならなかったのです。歴代自民党政権はそのことに一切触れることなく、60年間無策にも「4島返還」を叫んできたわけです。

今回の日口首脳会談だけでなく昨年一年間のアベちゃんの外交の失敗は目を覆いたくなります。①「国連気候変動枠組み条約(COP21)」パリ協定の批准遅れ、②ベトナムへの原発輸出の失敗、③TPP 協定からの即時離脱を公約にするトランプ米次期大統領の当選予測の見込み違い、④内戦状態にある南スーダンへの「駆けつけ警護」等の新任務を付与した自衛隊 PKO 派遣、⑤国連安保理での南スーダン制裁決議案の棄権投票、⑥唯一の被爆国日本が、2017年から核兵器を法的に禁止する条約の制定を開始するという国連決議案に反対する、等々外交での失敗が続いています。では失敗の原因は何か。それは日本が米国の属国になってしまっており、日米同盟のくびきから逃れることが出来ず、独立国としての自主外交をすることが出来ないからです。

日本が世界から尊敬される外交力を発揮するためには、日米軍事同盟を破棄して真の独立を果たし、日本国憲法を指針とした自主的外交を進めることです。

映画「風に立つライオン」を観て (2015.5)  
M・K (西神南)

1987年、歌手さだまさしが、実在の医師の体験をきいてつくった曲「風に立つライオン」に感動した俳優の大沢たかおが、さだに小説を依頼し、さらに映画化を切望して、今年、三池崇史監督が指揮をとり、映画上映された。

2011年の日本、3.11東日本大震災後の津波で跡形もなくなった地に立つひとりの黒人の青年の姿、それから1980年後半にさかのぼり、アフリカのケニアの過酷な野戦病院で医療に従事する若い医師、航一郎の物語が始まる。





物語の軸になるのは、航一郎と家族を殺され、自らも兵士になるように育った少年兵らとの交流である。彼らは大人たちの始めた争いで、家族を殺され、麻薬を打たれ、無理やり兵士に仕立てられ、人を殺し地雷の上を歩かせられ、恐怖で心をむしばまれていく。戦場では、非戦闘員であってもまっさきに殺され傷つくのは、弱い子どもや女性たち。

例えば、先日、イスラム国に殺害された、後藤健二さんも危険をおかしてまで、報道したかったことは、きっと、戦禍にさらされた土地に生活しているこどもたちのことを、訴えたかったのだろうなと、あらためて思った。

これまで戦争のなかった日本では、どうい考えられないこどもたちの実体を、知らないですまされないし、今の日本のこどもたちがこれからも、平和でいられるかどうか…安倍政権下では、こわい。

航一郎をはじめとした、こうした戦闘地域で医療に従事する医師や看護師、あるいは国内の僻地にあえて赴任する医師の志は、現在最先端医療として、遺伝子や細胞研究で脚光をあびている医療とは対極にあるものだと思う。現在日本での最高レベルの医療現場での、医療ミスや論文の捏造とか、マスコミをにぎわす事件を聞く度に、そこに「かけがえのない命や人」の存在があるのだろうか？との疑問がわいてしまう。

だから、この映画に描かれている「本来の人間の命を救う」としての医療活動に感動したのかもしれない。

航一郎は、夜、アフリカの大地に立って、ひとり「頑張れ～」と叫ぶ。尋ねられて、「頑張れは人に言う言葉ではないんだよ、自分に向かって言っているんだ」と応える。自分が決して強くて逞しい人間ではないことを知っているからこそ弱い自分に激をとばしているのだ。それこそ風に立つライオンなのだ。

最後のエンディングロールと共に、壮大な曲調のさだまさしの歌が流れる。その歌詞に「やはり、僕たちの国は残念だけれど、大切なところで道を間違えたようですね…」この歌が出来た頃はバブルの頃、驚異的な経済上昇に国民が浮かれていた頃だった。だが、2015年の今、この歌詞があらためて痛く突き刺さってきた。「やはり、僕たちの国は残念だけれど、大切なところで道を間違えたようで…」いや、そうあってはならないのだ。

憲法9条をないがしろにして、戦争をできる国にしようとし、福島原発の惨状に向き合わず、再稼働しようとする安倍政権のもとで、道を間違えてはいけぬ。そして、今が「大切なところ」なのだ。

私たちの存在は小さくて弱いけれど、それでも自分に「頑張れ！」と叫んで、私たちの国が道を間違えないように言っていけないといけぬ、と、ともすればめげそうになる自分に言っていきたいと思った。

映画は事実とは異なる内容で、あくまでもフィクションであるけれど、その底に流れるヒューマニズムに胸が熱くなった。

高島仟さんを偲ぶ会(8月5日) (2017.9)

〇生 (櫻野台)

この5月、高島仟さんが84歳で亡くなりました。

…三度の空襲…1931年日本軍部が柳条溝事件をでっち上げ満州に進出していった…この描写を端緒にして高島さんの文章は書かれています。5年前に西神ニュータウン9条の会が作成した文集「私のなかの戦争」への高島さんの寄稿文です。これに続けて15年にわたる戦争、自身が受けた神戸での銃爆撃、目の当たりにしたむごたらしい犠牲者の情景などが描かれています。



私が小学生のころ、亡き母が明石空襲のことを話してくれたことがありました。炭のように焼け焦げた死体があちこちに転がっていたということぐらいしか語ってくれませんでした。聞かせる側も聞く側も、大惨状のことなど積極的な話題にいたくなかったのかもしれませんが。もう少し戦災の壮絶さを聞かせてもらいたかったな、と今は思っています。

本筋に戻ります。8月5日に高島さんを偲ぶ会が行われました。その次第のなかで故人の足跡を出席者にスライド映写で紹介しようということになり、私とその素材制作に携わることになりました。そこで先述の文集を改めて読み返してみると、戦争なんて絶対にやっちゃあいけないんだとの高島さんの強いメッセージを感じました。故人は2006年西神ニュータウン9条の会発足から参画し、2016年から代表の職にも就いていらっしゃいます。その生き方の源泉が戦争体験のやりきれなさにあるのでしょうか。日本敗戦から72年、この実体験を語られる方が少なくなっています。現実世界に世界のあちこちで戦闘は毎日のように起こっています。私たちは貴重な方を亡くしました。しかし貴重な意思は引き継いでゆきましょう。会の席で市原さんが読まれた弔辞です。

※スライド映写の中で、カット割りや画面切り替えのタイミングに不備があり、ご出席の皆さまにたいへんお見苦しいところが起きてしまいましたこととお詫びいたします。

物心ついた頃から、雷が異常に怖かった。稲光と雷鳴が聞こえだすと体が硬直し血の気が引くような恐怖を感じた。阪神淡路大震災のあと 10 年近くもたった頃、ヘリコプターの爆音が聞こえてくると、何ともいえない不安がこみあげてきた。何故かなと思ったとき、激しい揺れと音に繋がっていると判り、何の脈絡もなく、雷の恐怖は 4 歳の爆弾の音と逃げまどった戦火に基づくと思いついた。戦後 60 年余りを経てやっと雷への異常な恐怖がなくなった。

昭和 20 年 6 月 5 日朝にも神戸大空襲(この日を第2神戸大空襲と言っている)があり、38 歳の母と背に負われていた 1 歳の妹が亡くなった。父が防空軍長?で須磨の若宮町内の消火のため残り、先に逃げた母と妹、4 歳の私の手を引いた 13 歳の長姉が途中、爆撃で地面に伏せたあたりで母にはぐれた。防火用水に全身入れという姉の言うことを聞かなかったので防空頭巾だけを水に濡らして被せてくれた。顔や手足に無数のやけどを負いながらも助かったのは、このおかげかもしれない。家の焼け跡で父と出会い、母とはぐれたあたりに行き、二人を見つけた。母のこめかみにひとすじの血の跡があったが、きれいな顔だったと聞いた。この時の記憶はないが、二人を若宮小学校の校庭に運んだのが、どこかの焼け残った雨戸であったことは覚えている。たぶん、その夜のことだと思うが「痛い、痛い」という声が聞こえる学校の廊下で、父と姉と三人で一晩を過ごしたことは忘れられない。母の写真は叔父の家にあったたった一枚のみ。昭和 16 年のお正月、国旗を揚げた門の前での家族写真。生後 2 週間の私が千羽鶴の着物を着せられ、母に抱かれている。いつのことか定かでないが、須磨海岸の松の枝に焼夷弾のリボン(垂直に落ちると物にからみついたためにつけられていた)がひらひらと揺れていたのを妙に覚えている。家も焼け、加西市の叔父の家の離れに疎開することになった。机の上に白い小さな箱が二つ祭られた。龍野に学童疎開に行っていた 10 歳の次姉と 6 歳の兄を父が連れて帰って来た。母と妹が亡くなったことについては、父も長姉も何も言わなかったらしい。言えなかったのだろう。その次姉に「お母ちゃんは、マンマンちゃんになった」と小さな箱を指して 4 歳の私が言ったらしい。母を知る村の人達が、前髪が焼け、顔や手足のいたるところにやけどの白い薬を塗った私を可哀想にと見に来てくれた。

75 年を経た今でもやけどの跡が残っている。その頃は毎晩5人で母と妹のために御詠歌をあげていたらしい。姉たちは本を見るのに私は諳じていたことを姉から聞かされた。遊びながら御詠歌を口ずさんでいたらしい。家と職場、妻と子を亡くし、一生暮らしていける貯えも「預金封鎖」にあった父は、4 人の子供を置いて仕事で神戸に出ることになった。叔父叔母の援けを受けながらも、女学校を中退した長姉が私達を育ててくれた。食料はじめ何もかもが乏しい中、川でどじょうを捕り、田圃でいなごをつかまえて食料にした。叔母がとてもやさしい人で自分の里帰りに子供と私と一緒に連れて行ってくれた。

次姉が書いた戦争体験記に、私が「野焼きの火や村のサイレンの音を異常に怖がって姉にしがみついて泣いた」とあるが、そのあたりの記憶はない。小学校に上がった頃、ランドセルが布製であることでいじめられた。父にも姉にも言うてはいけないと子供心に考え、登校を嫌がった。集団登校に行かず、姉が自転車で送ってくれたり、時には家の前を通られる学校の先生が送って下さることもあった。やせて目ばかり大きく皆になじめないオドオドした子が目ざわりで、格好の標的にされたのだろう。ランドセルのかぶせに虹の絵が描かれていて、きれいな色彩が今も目に残っている。父が神戸から帰ってくるのは1週間か2週間に一度。帰って来るだけでうれしいのに、当時手に入りにくいお土産が楽しみだった。また、家にいる時は小さな空地に芋やなんきんを作った。大きいばかりで甘味のないものができた。鍋のふたで油をよけながらドーナツを揚げてくれたことを覚えている。甘い物のない時代、多分おいしかったのだろうが残念ながら味は覚えていない。4人の子供を残して亡くなった母、さぞ無念だったことでしょう。又、近頃、父の思いがよく理解でき、その生き方は見事だったと感じています。楽天的で温和、優しく人の面倒みもよかった。須磨の家で庭の無花果が熟すと、ご近所に家族数分を配って歩いた。物のない時は貴重品だったのだろう。子煩悩で愚痴を言わず、生活を楽しむすべを知っていた。我が家で一番つらい目にあったのは父であろう。お隣の「なんばのおばちゃん」のところに大きなシェパード「ポス」がいた。4つ足のポスと私は身長が同じくらいで、毎日ポスの首にかじりついて遊ぶ大の仲良しだった。おじさんは軍医として出征され、しばらくしてポスは軍用犬として戦争に取られた。人だけでなく動物も大切な命をどれだけ無駄にしたことでしょう。

「戦争をしてはいけない」「食べる物が無い」ということが想像もできない子供達の未来はどうなるのでしょうか。いささか平和ボケの感がある今、一人一人がしっかり考え、地に足をつけなければと思います。

核を使う戦争が起きれば地球も人類も滅びます。自国の利益ばかりを考えず、命あるものを考えてください。核にかける莫大な資金があれば、世界の貧困はなくなるでしょう。各国のトップに立つ頭の良い人達は、どのようにお考えなのでしょう。

75年前の4歳児の記憶であるが強烈な体験を忘れることはない。

「戦争ほどむごいものはない」



線路より北側の若宮小学校付近(神戸市蔵)

大軍拡反対、憲法改悪を止めよう

23.5.28 九条の会全国交流集会（報告）（2023.7）

—大江健三郎さんの志を受け継いで—

大西慶雄（春日台）

9条の会全国交流集会が5月28日、東京の日本教育会館で約300名の参加で開催されました。今回の集会は、5年振りで全国32都道府県から集まり24団体の「九条」の会がその取り組みを発表しました。

冒頭挨拶を行った「九条の会」小森陽一事務局長は、今年3月に亡くなられた大江健三郎さん(九条の会呼びかけ人)の9条にかけた思いにふれながら「G7-広島サミットが被爆地・広島で開催されながら被爆者の思いを無視し核抑止を正当化する広島ビジョンが発表されたことは断じて許されない。9条改悪を目指す岸田政権の本質だ」と述べ「岸田政権の大軍拡は、専守防衛を捨て憲法の平和主義を否定し国民のいのちと暮らしを危機に追い込み大增税に走ろうとしている。今こそ9条の会の活動が大きな役割を担っている」と呼びかけました。

交流集会には、北海道から熊本までの24団体がそれぞれに工夫をこらした活動の報告を行ない「9条の会」活動の経験交流となった。

・札幌栄東9条の会

シベリヤ抑留者、広島被爆者、満州引揚者など7人で設立

若い人へ平和バトンを繋ぐため他団体と分担し7つの高校前で宣伝活動

・全国首長九条の会

秋田元湯沢市長鈴木さん 3期市長 祖父母に戦争はダメと教えられ育った。東北の6県の市町村長9条の会を作り現在全国首長九条の会は215名に拡大

・栃木那須野が原九条の会

歩道デモ 近隣の商店にも宣伝 ポストカード作成

・埼玉溪流9条の会

右に釣り竿左に憲法 河川の放射能を測定 趣味を活動に

・九条かながわの会

県内17団体と連絡会 米軍の横浜ドックに反対 事務局長に若手弁護士、若者が集会の企画段階から参加

・東京/九条の会中野

会員にポスターを公募「銃に花を9条に翼を」「憲法は戦争が残した平和への羅針盤」の2

作を各500部印刷 米口大使館前で英文のポスターを掲示

・東京/千住九条の会

9条の碑を建立(球体の碑)



千住の球体の  
「9条の碑」

・東京/葛飾教職員九条の会

成人の日にアピール活動 年賀状の配布 今年 6 月に全国教職員九条の会を設立予定

・九条の会東京連絡会

600 の九条の会が参加 高齢化で休止の団体もあり半減 単独運営から他の九条の会と合流も

・静岡

世界九条の会の開催を提案 リニア新幹線に反対/原発 1 基分の電力消費

・長野/全国首長九条の会元阿智村長岡庭さん

満蒙記念館 8000 人が満州開拓へ半数が帰国できず 自治体が戦争を推進、平和は地域から支える必要 住民に漠然とした戦争への不安ありそれに応える運動を

・岐阜九条の会

サロン 9 序の会を 365 回開催 問題提起とおしゃべりタイム

・滋賀/全国首長九条の会平尾米原市長

平和は自治体の問題である 非核平和都市宣言を実現 忠魂碑を遺族会とも相談し廃止、民間人戦死者も含めた平和モニュメントを建設 二度と遺族会を作らない

・京都/九条守ろう亀岡の会

隣町に長距離ミサイルの「祝園弾薬庫」配備に反対

・大阪/九条の会豊中いちばん星

運営委員は全員女性で活動継続中

交流会終了後「九条の会」世話人の六氏からの挨拶が行われた。

愛敬浩二早大教授「市民の運動が九条の改悪を止めている」

浅倉むつ子早大名誉教授「九条には人を思いやるケアの思想がある」

池田香代子(翻訳家)「戦争は始めてしまえばハッピーエンドはない」

池内了名大名誉教授「軍事研究は学問を殺す」

伊藤真弁護士「安保 3 文書に憲法の言葉はない、憲法が自由と権利を守る」

清水雅彦日体大教授「保守層も巻き込んで専守防衛を守ろう」

最後に事務局の高田健さんが

「文字通り九条の会は正念場にある。改憲を阻止し世論を高め運動を強め大軍拡を止めよう。今日を九条の会の再出発にしよう」と呼びかけた。

西神ニュータウン九条の会(大西)記

(追記) なお YouTube「九条の会全国交流集会」でもご覧いただけます

<https://youtu.be/63dhDUNvU28>

集会の冊子も事務局で編集中です。



## 「組織と個」について（2017.2）

小川幸四郎（平野町）

私は永らく組織の中でいわゆる組織人間としての生活をして来ました。そんな中でいつも悩まされたのが組織と個人の考えの葛藤でした。そして、この悩みは既存の組織から解放され、リタイアされた皆様にとっては一皮むけたテーマかもしれません。しかし、それでも私が関わってきた運動の中でとりわけ頭を悩ませた問題をお話します。いわゆる「原爆」を巡る運動です。



この運動は大きく分けて3つの組織が関わり、今尚それぞれがそれぞれに自らの理念、主張を掲げてこの運動を引っ張っております。組織が分れるのには当然その違いがあるのは理解出来ます。ただ腑に落ちないのはこれら運動組織が「誰の為、何の為」に運動しているかをもう一度原点に帰って考えて欲しいのです。「誰の為、何の為」、もちろん原爆の被害に遭い、今尚苦しんでおられる方々を支援する為の筈です。しかし、残念ながら世間の目からは「何でいつまで分裂しているの」との疑問の目ではないでしょうか。そこには、やはりそれらの組織がその運動組織の運動課題を目的化してしまっている弱さを感じるのです。

「誰の為、何の為」という原点を押えるならば、これら組織も登り方の違いとして被爆者の声に寄り添い、その方達の声を一義にした幅広い運動組織体を形成出来ないでしょうか。主体者はこの運動では被爆者です。

今、原発問題でもその事が実は問われております。私も福島に寄り添う事を自身のテーマにして自分なりの関わり方をしておりますが、現地福島でも「3・11集会」一つ政府・自治体主催以外にも大きな2つの組織と市民組織が別々に集会を開催予定です。被災者を横に置いた主導権争いのようにも思え残念でなりません。組織を主導する方々の思いも理解できますが、日本の運動の弱さをこれらの運動から感じています。皆様はどうお思いですか。ここにも実は「組織と個」という問題が実は横たわっております。

## あの日、私はパリにいた（2017.2）

櫻野マロン（櫻野台）

二十二年前のあの日、日本より八時間遅れのパリでいつものように朝を迎えていた。三か月の滞在で借りた小さなアパートマンの部屋で、語学校へ出かける準備をしていた。レンヌ通りにある仏語学校アリアンスフランセーズは短期でも受け入れてくれるので、世界各国の留学生で混み合っている。自室を出てメトロ



を乗り継いでも三十分あれば行ける便利な場所であった。その日の気分によってはルーブル美術館の正面にひらけているチュイルリー公園を歩いて、乗り継ぎ駅コンコルドまで行く。

まさに出かけようとしたその時、電話が鳴った。パリ在住の長女からであった。

「神戸で大きな地震があったらしいよ。長田が燃えてる」咄嗟のことに事情がよくのみ定めなかった。日本はもともと地震国であるのでそれほど驚くことではなかったのだが、「大地震」「神戸」「長田が燃えてる・・・」「死者多数」と聞けば尋常ならざる事態としてわが身に迫ってきた。神戸の自宅には私の留守中は二女が住んでいる。すぐさま電話を入れてみるが繋がらない。同じ西区に住む長男の方はニューヨークへ出張中。妻子は京都の実家へ行っているのでもまずは安心。

学校どころではなく、すぐさま帰国できないかと航空会社へ連絡してみたが、空路はともかく、神戸では陸路が機能していない様子と知らされた。何はともあれ情報を求めてシャンゼリゼの娘の職場へ駆けつけた。通信社だけあって刻々と日本からの情報が入ってくる。空路届いたありったけの日本の新聞を借りて近くのカフェに飛び込んで片っ端から目を通した。これまで見たこともない大きな活字の見出しと、信じられない市内の惨状の写真。神戸の見慣れた場所や建物が到底現実とは思えぬ光景で目に飛び込んできた。



同時に何か違和感を感じた。そこには火災にあった焼け跡ではなく、生の建物が奇妙な形で押し潰されたりひっくり返っていたりしていた。焼き尽くされて黒こげになったり、土砂災害で押し流されていく建物はこれまでも幾度となく映像や戦災時の記憶にあったが、さっきまで普通の生活をしてきた家屋が、大きく傾いたり押し潰されている様子は、新聞の写真だけでもこれほどの衝撃を受けるとは思っても

みなかった。直ぐには現実と受け止められず、娘は無事であろうかとひたすら祈りながら時差を数えるしかなかった。

ようやく神戸の自宅と連絡が取れたのは日本の翌未明であった。二女の疲れて眠そうな声が応じた。無事でよかった。「家の中はむちゃくちゃ。水も止まってる。外壁が落ちてる。私は大丈夫」。最小限の現状だけ聞いた。

日本の惨状は世界中に発信された。フランスでの取り組みは素早かった。人々は「何が必要か」を考え、緊急物資を集め、日本の被災地へ向けて救援活動が開始された。自分たちが何をすればいいのかを心得ているようだった。「国境なき医師団」も被災地で一分一秒を争う人命に対して、世界のどこにでもすぐさま飛びたてる準備がなされているという。なのにこれを阻んだのが当時日本のお役所仕事であったと聞く。もし少しでも早く医師団を受け入れていれば、もっと助けられた



のではないかと悔やまれる。危機感の弱さが露呈した出来事であったと、二十二年前の悔恨と反省である。

### 子どもの声 (2017.3)

榎野マロン (榎野台)

異常事態である。いつからこの様になってしまったのか。いま、子どもの声が騒音として条例の規制対象になっている自治体があるという。実際に保育園の近くの住民が、防音設備の費用や慰謝料の支払いを求めて訴えを起こしている。穏やかならざるこの状況をどのように理解すればよいか大いに戸惑っている。



「国の宝」と言われる子供たちが「声がうるさい」という理由で行き場を失くし、遊び場を追われようとしている。環境保護条例のもと様々な事項に及んで許容範囲内での規制が敷かれているが、子どもの声となるとどう計ればいいのか判断に窮する。

先日、孫の通う保育園の運動会へ行った。敬老席へ座らせてもらって一歳児から年長組までの可愛い演技を楽しんだが、例年と違って何か異質な感じを受けた。

子供たちがいっしょうけんめいダンスに興じている。ところが音楽が聴こえてこない。おかしいな、音楽なしでリズムが取れるのかなと不思議であったが、難聴気味の自分のせいかと思い、あとで娘に聞くと音楽のボリュームを極力低くしていたとのこと。近隣住民に迷惑を及ぼさぬようとの園側の気遣いであつたらしい。

人にはそれぞれの事情があり思惑があるだろうが、昔から子供が騒ぐのは当たり前とされてきたことが、何故こうまで許せなくなってしまったのか驚きを隠せない。

どこかでのアンケートの結果を見てもわずか数パーセントの差で辛うじて「許容」がうわまっていたが、これほどとは思わなかった。

ただどちらの言い分が正しいとか正しくないとかいえる問題ではなく、個々の気持ちの持ちようが大いに関係してくるものと思える。かく言うわたしもこれまで子供はかなり苦手な存在であったが、勝手なもので実際に娘におそく授かった孫の世話を引き受けてからは、よその子たちもみんな可愛いと思えてきた。

騒音と言われる子供の声もさほどうるさいとも思わなくなったのは、自分が寛容になったのか、身勝手なのか、人それぞれの持つエゴであろうか。

もうすぐ六歳になる孫のひとつ「だっておとなもむかしはこどもだったんでしょ」

(2016年11月記)

M.Yさんのこと (2015.3)

鹿島 学 (須磨区 元西神在住 植木屋)

神戸の震災後、仮設訪問ボランティアで仲良くなった方の手紙を一通紹介させていただきます。



「学さんいろえんぴつがようし 8 日の日につきました ありがとうございます  
ございますいろんながようしがあるのですねめっせちありがとうございます  
私は花がだいすきです。

しんでも花のええをかきつづけたいとおもいます。きれいなからふる  
のもちが出てすばらしいものです

学さんも花がすきだといってくれたので私は、花のええしかいまわほかにないのです。ひまがあ  
ればすぐついついいろえんぴつをもつくせがついてしまうのです。

一人ですんでいるとさみしくて心の中をひやしてくれます花は、とてもやさしくてかわいいとおも  
います。

学さんみたいにほかのええがかけたらとてもすばらしいとおもいます。

小学校 2 年生しかいってないのでそれがとてもかなしくてたまりません。内がびんぼでしたので  
かどくもおおくとつらいめにあいました。いろんなしごともしてきました。でもいまおもえば  
べんきょうなつたとおもいます。

たのしいことうれしいこともしあわせなせいかつでしたが。いまおもえばうそのような六十九才に  
なつて いままで私は、なにをしてきたのかくるしみばかりがのこっています。

でもいまは、つらいことがあつてもかんがえぬようにしてたざ花のええをかくのがたのしみにして  
その日をすごしています。

学さんもいろんなつらいめにあつたでしょうお母さんからききました。学さんは男だからしっかり  
つよい男になつてすきなみちをあるいて下さいね。まだわかいからいくらでもやりなおせます。お  
母さんおだいじにしてあげて下さい。

この夜でおやぼだいちなものは、ありませんお金おいくらつんでもおやは、かえないのです。

むりをしないで又いろんな花のええおかいておくります。ほんとうにありがとうございました私し  
がどこえかわつていてもかならずれんらくします。がんばつて下さい。

十二月九日たしました。」

神戸市西区竹の台 3 丁目 18 竹の台公園仮設住宅 M・Y(故人)

(イラストは3枚ともM・Yさんの描いたものです)



税制の歪みが社会保障を劣化させている (2017.11)

角屋洋光 (狩場台)

総選挙が終わりましたが、さっそく財務省は高齢者医療の窓口2割負担や、診療報酬引き下げを言い出しました。

“下流老人”という言葉が流行りました。特集した週刊誌は「60歳以上無職世帯の1カ月の生活費平均は約21万円、年金から税・保険料を引いた可処分所得は15万円。月6万円の赤字(平成26年度家計調査)。1千万円の貯金があっても、毎月6万円の赤字では、70台前半で底を突く」と解説しました。



国民健康保険料は払いたくても払えない高額で、介護保険料は高所得者にはやさしいが低所得者には割高です。使いたい時には、利用料が高くてサービスの一部しか使えません。政府は「保険料を払わなければ給付はない」と、まるで民間保険と変わらない「排除の論理」をふりかざします。

こうした社会保障の劣化が顕著になったのには、二つの原因があります。一つは、労働者の働かせ方が、人材派遣が解禁され、大量のワーキングプアが生み出されたことです。働いても貧困という状況では、社会保険は成り立ちません。二つ目は「税と社会保障の一体改革」路線です。負担と給付を天秤にかけ、給付を増やすなら負担を増やす、負担を減らしたければ給付を減らす、というわけです。この路線の別名は「持続可能な社会保障」です。人口の高齢化を口実に「社会保障を持続させるためには仕方がない」と国民を諦めさせるための方便です。

これにだまされる国民が本当に多いのですね。社会保障とは、一言で言えば、基本的人権を守るために富を再配分することです。所得の再配分で憲法25条を実現するのが、社会保障です。日本

の経済力は世界第3位。企業の内部留保は400兆円です。再配分すべき富は潤沢にあります。問題は、税制がゆがめられ、最も担税力のある企業と富裕層が優遇され、社会保障の財源が小さくさせられていることです。いくら消費税を増税しても、法人税や富裕層への減税に使われるばかりで、税収の全体は減っているのですから、社会保障に回るはずがありません。大企業・富裕層に対する規制を強め、所得の再配分をどれだけ実現できるかが、まさに高齢社会にとって求められていることではないでしょうか。

## 新型コロナウイルスと社会保障 (2020.5)

角屋洋光 (狩場台)

新型コロナウイルスによって、通常の生活がたちゆかなくなり、当たり前だったことが当たり前でなくなりつつあります。外出自粛というだけでたちまちに経済がまわらなくなり中小零細事業者の経営危機が深刻化しています。大手の企業は生産規模の調整のためとして、非正規雇用を解雇し、利潤の調整弁にしています。解雇された労働者は、何の保障も無く放り出され、生活の見通しがまったくありません。



まさに1929年から始まった世界大恐慌を思い起こさせる事態とっていいのではないのでしょうか。このときは労働者を使い捨てにする資本主義の病巣のあり方が問われ、アメリカでは企業と市場に対して国家が介入するニューディール政策がとられました。ニューディール政策の主要な政策の一つが社会保障でした。資本主義国で初めて社会保障法が誕生したときです。

しかし、このアメリカの社会保障の内容は貧弱なもので、全国民を対象にした医療保険はなく、現在でも先進資本主義国で最も社会保障の遅れた国になっていることは皮肉です。アメリカの感染者数が世界一になった背景には、まともな社会保障が機能していないというアメリカ資本主義の欠陥があるのではと思います。

ヨーロッパでも、イタリアで感染者数、死者数が多くなっていますが、医療体制が削減されてきた結果だと指摘されています。ヨーロッパでは、アメリカよりもはるかに進んだ社会保障体制がつくられてきましたが、この間、EUの緊縮財政政策が社会保障を後退させてきたからです。

感染症の専門家は、新型コロナウイルスとの闘いは長期戦になると警告を発していますが、長期戦になるほど、社会保障のあり方が問われることになります。

雇用保険で失業者の生活をまもることができるのか、医療供給体制では公的病院が本来の役割を發揮することができるのか、年金積立金を株式購入にあてて大赤字を出したのは政府の責任なのに年金給付額を維持できるのか、介護サービスを必要とする自宅待機の高齢者に介護サービスを

きちんと提供できるのか、etc. 新型コロナウイルスとの闘いは、安倍首相が描くような単純なものではありません。原因が何であれ、国民の人権、生存権をまもるためには、社会保障の拡充が必要です。

自助論を乗り越えるために(1)

「自助、共助、公助」論のルーツをたどれば (2020.10)

角屋洋光 (狩場台)

菅新首相は、自身がめざす理念の第一に、「自助、共助、公助」論(以下、自助論とする)をかかげた。安倍前首相の政策を継承するものだが、自助論とはなにか、ルーツから考えてみたい。

最低限度は..



昨今の自民党は、これを防災のスローガンとして活用し、国民の認知度をあげたいようだが、元は1995年に社会保障制度審議会が「社会保障はみんなで支えるもの」との勧告を出したのが始まりだったと思う。当時、企業が社会保障負担をコストとして軽減するために、このような勧告を出させたのである。社会保障関係の学識者や諸団体から猛反発を受け、すぐには具体化できなかったが、小泉内閣から社会保障費削減の理念として使われはじめ、安倍内閣のもとであらためて自助論として打ち出されたものである。

この自助論が根拠としているのは、戦後まもない1950年に社会保障制度審議会が出した「50年勧告」である。勧告は、「国民が困窮におちいる原因は種々であるから、国家が国民の生活を保障する方法ももとより多岐であるけれども、それがために国民の自主的責任の観念を害することがあってはならない。その意味においては、社会保障の中心をなすものは自らをしてそれに必要な経費を醸出せしめるところの社会保険制度でなければならない」とした。この文章には二つの特徴がある。一つは、「国民が困窮におちいる原因は種々である」などとして、困窮の原因を不問にしていること。二つ目は、「国民の自主的責任の観念」を持ち出し、「自らをして必要な経費を醸出せしめると、国民負担を当然の前提としていることである。

これだけを読むと、50年勧告はなんとひどい勧告だったのかと、思われるかもしれない。しかし、それは正しくない。この文章は、勧告の中では財政問題における総説として記述された、いわば各論なのだが、50年勧告には、全体の基調を述べた前文があり、そこでは、全く異なる記述、あえて言えば相反する記述がされているのである。

前文は、「日本国憲法第25条は」から始まり、25条とは何かを次のように解説している。「国民には生存権があり、国家には生活保障の義務があるという意である。これはわが国も世界の最も新しい民主主義の理念に立つことであって、これにより、旧憲法に比べて国家の責任は著しく重く

なったといわねばならぬ。」とし、さらに「国家がこういう責任をとる以上は、他方国民もまたこれに応じ、社会連帯の精神に立って、それぞれの能力に応じてこの制度の維持と運用に必要な社会的義務を果さなければならない。」とした。

前文の格調高い国家責任の宣言と、総説の自己責任論は、両立しがたい文章なのである。50年勧告は、決して肯定的に自助論を展開したのではなく、むしろ自助論は前文には一言もない。なぜ「自主的責任の観念」が唐突に記述されたのか。前文の意味をさらに深めてみたい。(つづく)

自助論を乗り越えるために(2)

50年勧告のモデルはベヴァリッジ報告 (2020.11)

角屋洋光 (狩場台)

前回、50年勧告の前文の一部を紹介したが、その中で私が特に重要だと思うのは、「世界の最も新しい民主主義の理念に立つこと」を宣言していること。そして、国民の負担は「能力に応じて」としているところである。



「世界の最も新しい民主主義の理念」とは何か、は、明文にはない。しかし、勧告には本文以外に、審議会会長の大内兵衛氏が、吉田茂首相宛に書いた序説がある。ここで大内氏は、「貧困の問題は古い問題だが、今日、解決する方法は、全く別のものでなくてはならない。なぜなら、人間の生活は全く社会化されており、貧困はそこかから発生しているので、国家が社会的に解決する方法をもたねばならないからである」との趣旨を述べ、「ゆりかごより墓場まで、すべての生活部面が保障される」国の例をあげ、日本でもこういう制度なくして、この問題は解決できないと、述べた。「ゆりかごから・・・」の例示は、まさにイギリスのベヴァリッジ報告をさしていることは明らかである。つまり、大内氏は、これからの社会保障は、戦前の社会保険を採用すべきではない、イギリスなどで実施されている社会保障制度を見習う必要があるという、意味を序説で述べたのである。

イギリスのベヴァリッジ報告とは、第二次世界大戦中の1941年、労働組合会議の請願を契機としてチャーチルが委員会を設け、その検討に基づいて示された報告が、委員長のウィリアム・ベヴァリッジ教授の名をとってベヴァリッジ報告と呼ばれているものである。

「大西洋憲章」をうけて、国民の人権・生存権を保障する社会保障計画の報告書として出されたもので、戦時に前線の兵士の志気を鼓舞するために、前線に大量に送られた。

ベヴァリッジ報告は、イギリスにおける戦後の国づくりとして、「社会保障とは、失業、疾病もしくは災害によって収入が中断された場合にこれに代わるための、また老齢による退職・・・のための、所得の保障を意味する。」・・・すべての国民にナショナルミニマムとして最低生活を保障する・・・など

と提起した。イギリス国内でベストセラーとなり熱狂的に支持され、ファシズムと闘っていた他の連合諸国にも甚大な影響を与え、戦後の福祉国家の基本モデルとなったとされている。(つづく)

自助論を乗り越えるために(3)

「自助、共助、公助」論は専制政治時代の遺物 (2020.12)

角屋洋光 (狩場台)

50年勧告が、世界の最も新しい民主主義の理念として、ベヴァリッジ報告をその一つとして考えていたことは間違いない。しかし、人権と民主主義を拡大し、社会保障制度につなげたのは、ベヴァリッジ報告にとどまらない。

主要なものを年代別に並べれば、①1941年、大西洋憲章(ファシズムに反対し社会保障の確保を宣言した世界最初の国際文書)。②1941年11月、ILO国際労働総会での「大西洋憲章支持決議」。③1942年3月、ILO「社会保障への途」。④1942年11月、大西洋憲章を受けてのベヴァリッジ報告。⑤1944年、フィラデルフィア宣言。⑥1948年、世界人権宣言、などがある。

これらはすべて、第二次世界大戦における反ファシズムの闘いから、人権と民主主義、そして社会保障の確立を求めたものである。最後の世界人権宣言をあらためて読み返してみよう。

「第1条 すべての人間は、生れながらにして自由であり、かつ、尊厳と権利とについて平等である。…第22条 何人も、社会の一員として、社会保障を受ける権利を有し、かつ、国家的努力及び国際的協力を通じ、また、各国の組織及び資源に応じて自己の尊厳と自己の人格の自由な発展とに欠くことのできない経済的、社会的及び文化的権利を実現する権利を有する」。世界人権宣言には、世界の最も新しい民主主義が、短い言葉で言い表されている。



まいにち せいかつ するときに  
たすけて ほしいです。

人間には人権と自由があり、生存権を保障するために社会保障制度が欠かせないことをうたっているのである。それが大内氏に、『貧困は社会的に発生している、だから国家はそれを解決する方法を持たねばならない』と、言わせたのである。

この民主主義の流れと、「貧困の原因はいろいろで」「自主的責任の観念が必要」という自己責任論は、整合し得ない。それがなぜ50年勧告に記述されたのか。

ここからは推測になるが、憲法制定時もそうであったように、当時の政府内の官僚には世界の民主主義の流れを理解できず、戦前の社会保険体制の再構築を図った官僚たちが多く残っていた。勧告の自助論は、こうした官僚たちの抵抗の産物ではなかったのかと思われる。事実、審議会では激論が行われ、なかなかまとまらなかったとの証言があったと、研究者は述べている。自助論は、現在は新自由主義のもとで行われているが、内容的には戦前の専制政治のもとでの自助としての社会保険にひきもどすものである、ということから見ても、推測は大きくは間違っていないのではないだろうか。

戦後、この自助論は現実的な力を持たなかった。それは戦後日本における民主主義の広がり、社会保障拡充を求める国民の運動などにより、戦後の一定期まで社会保障の拡充が行われた事実を振り返れば明らかであろう。

自助論に再び息を吹き込んだのが、新自由主義である。しかし、菅新首相がいかに「自助」論をふりかざしても、もはやコロナ禍のもとでは通用しない。国民には生存権があり、国家には重い責任がある。25条を活かす新しい社会のあり方は、私たち国民が、自らつくりあげなければならない。その意味で、「自助」論をふりかざす菅内閣は、誕生したばかりではあるが、一刻も早く退陣させ、新しい政府をつくることを、求められていると思う。

## 思い出の品 (2019.2)

蒲田雅子 (茨木市)

座敷に置かれている座卓と可愛い木馬を見ると、いろんなことが走馬灯のように浮かんでくる。これらは今は亡き父の作ったものである。

職業軍人であった父は二十五歳で終戦を迎え故郷である四国高松に帰った。東京育ちの母は父に勤めに出ることを勧めたが、父は生涯外に働きに出ることはなかった。

機械いじりや工作が好きだった父は祖父の力を借りて小さな木工所を営んだ。その頃の讃岐は漆器が盛んであった。工場で漆塗りの座卓の木地を母と二人で朝早くから日が暮れるまで作っていた。作りなれない製品でも、品不足の当時はそれなりに売れたそうだ。私達子供三人も手伝ったりしながら仕事が終わるのを待った。仕事が終わってみんなで工場から家に帰るのが嬉しかった。

私が小学校五年生の時、父に手伝ってもらって理科の研究としてこの工場の木片や樹皮を集めて木材の標本をつくった。作品は理科室にしばらく飾られていた。茶色くなった賞状だけが今も残っている。

木工所経営は父の武士の商法でなかなか上手いかなかった。父の製品も漆塗りの座卓の木地から天然の木目を生かした座卓へと移っていった。

私達夫婦が初めて家を持った時、お祝いに贈ってくれたのが天然の座卓であった。おそらく父は自分の製品の中で一番気に入っていたものだと思う。自然の木の温かみの残る品で、今も子供たちが集まると必ずこの座卓を囲む。木馬は我が家に初孫が生まれた時、本を見て作ってくれた。ニス塗ったシンプルなもの、四人の孫がつぎつぎに乗って遊んできた。今は役目を終えてぽつんと部屋の隅に置かれている。





父は十三年前に他界したが、子供の入学、就職の折々にもらった手紙などを読み返すとしみじみ  
と思い出す。はたして自分は子供たちに何か思い出になるものを残してやれるだろうかと思う。  
(筆者は茨木市在住の主婦で、当HPを愛読し応援していただいています。 編集委員)

お兄ちゃんになった僕 (2019.6)

蒲田雅子 (茨木市)

ぼくは5歳の男の子、名前を悠人(ゆうと)といいます。子宝(こだから)  
幼稚園のききょう組。マンションの下に迎えに来る青バスに乗って幼  
稚園に通っています。

お父さんとお母さんと僕の3人家族でしたが、4月24日に妹が産まれ  
ました。名前は彩葉(いろは)ちゃんです。だから僕はお兄ちゃんになり  
ました。

お母さんが入院している間はおばあちゃんが手伝いに来てくれていま  
した。おばあちゃんは少し不安そうに僕の食事を作ってくれ、お弁当の日  
は「このくらいは食べられる」と僕に尋ねます。僕は幼稚園から帰って  
空っぽのお弁当箱を見せました。



マンションのベランダからお母さんの入院している病院が見えます。おばあちゃんがここから「お  
かあさーん」と呼んでごらんと言います。呼んでみるとお母さんの声が聞こえてくるような気がし  
ます。

6日目にお母さんと赤ちゃんの退院が決まりました。午前中にお父さんと病院に迎えに行きまし  
た。その時初めて赤ちゃんを抱っこさせてもらってゆっくり顔を見ました。「彩ちゃんかわいい」と  
思わず言いました。小さくて壊れそうです。

その夜はお母さんと赤ちゃんと僕の3人で同じ部屋に寝ました。嬉しい気持ちになりました。しば  
らくすると赤ちゃんが泣き出しました。僕が眠りかけるとまた赤ちゃんが泣きます。僕は赤ちゃん  
と寝ることを諦めました。この日からお父さんと別の部屋で寝ることになりました。僕の気持ちは  
複雑です。

ある夜お父さんの帰りが遅いので、お母さんが本を読んで僕と一緒に寝てくれていました。ぼくが  
うとうとした時、お母さんは赤ちゃんの方に行ってしまうました。でも僕はその時まだすっかり眠  
っていなかったのです。お母さんにまだいて欲しかったのです。でも僕はお兄ちゃんだからじっと  
我慢しました。翌朝、お母さんに「もっと一緒にいて欲しかった」と言ったとたん涙が零れてしま  
いました。するとお母さんが僕をぎゅっと抱っこしてくれて「ごめんね」と言ってくれました。僕は元  
気に幼稚園に行くことが出来ました。

今日よりは兄となる子の菖蒲の湯

雅子

(筆者は茨木市在住の主婦で、当HPを愛読し応援していただいています。

編集委員)

友よりの絵はがき (2019.11)

蒲田雅子 (茨木市)

十年程前の秋も深まった日に友から絵はがきが届いた。それは尾瀬沼に立金花が咲き後方に雪の残った至仏山が見える穏やかな風景であった。添書きに「この度、長い旅に出ることになりました。思い出をありがとうございました。どうぞお健やかに……」とあった。

この二日前に彼女が闘病の末亡くなったことを友達から知らされていたので、はがきを手にした時は驚きと悲しみで足が竦みそうになった。綺麗ないつもの字であった。



彼女とは中学、高校と同じで卒業後もリュックを背負って旅をするなど掛けがえのない友人であった。彼女は卒業後、京都の看護短期大学に進みさらに助産学を修め母乳育児コンサルタントとして活躍していた。

結婚後二男一女に恵まれたが、次男を三歳の時交通事故で亡くし、長女を二十歳の時急性リンパ性白血病で亡くすという逆縁にあった。

この長女は中学生の時新体操で全国大会に、高校で始めた棒高跳びでも日本選手権に出場するなど「いつも前を向いて、どんな時にも全力疾走」の元気な明るい娘であった。さらに、闘病中の感謝の気持ちをNHKの青春メッセージに四国代表で発表した。その時客席で微笑んでいた彼女を今でも思い出す。

彼女は娘が亡くなった翌年に同じ病気で悩んでいる人の役に立てればと、娘の書き残したものと闘病中のことを「私の娘は70センチ」という本に残した。この本は私の本箱に大切に立てられ、秋が深まると手に取り彼女を思い出す。

その後も母乳指導に力を注ぎ頑張っていた彼女が乳癌に罹ろうとは思ってもよらなかった。そして自分の人生の終焉にあたって果たして友人に「どうぞお健やかに」と言えるだろうかと自問した。もし天国というところがあるのなら、三人で楽しく遊んでいてくれることを願わずにはいられない。

五年程前彼女が眺めたであろう尾瀬沼からの至仏山の風景を眺めたく訪ねてみた。この風景を彼女はどんな気持ちで眺めたことであろう。

(筆者は茨木市在住の主婦で、当HPを愛読し応援していただいています。

編集委員)

行ってきました「あいちトリエンナーレ」 (2019 . 11)

狩場台の亀 (狩場台)

「あいちトリエンナーレ2019」の中の企画展「表現の不自由展・その後」が再開されると聞いて、急遽名古屋に行くことにした。日本における表現の自由が脅かされていることを見せつけられた今回の事件の発端となったものを自分で確かめたかったからだ。



「あいちトリエンナーレ」は複数の会場で行われており「表現の…」は愛知芸術文化センター会場で行われている40ほどの展示の中の一つだ。会場に着くと「表現の…」の観覧は抽選だと知らされた。抽選券をもらう列には多くの人が並んでいて関心の高さを表している。特に混乱もない。当選番号の発表はテレビで行われたが残念ながらハズレた。当選は30人で、倍率は20倍強と思われる。約1時間後にもう一度抽選券の配布があるということなので、それまでの間他の展示を観覧することにした。この会場では国際現代美術展が行われており、大がかりな作品が多く、映像等もある。一般的に美術や芸術といった言葉からイメージする枠を超え、様々な問題提起がなされていた。例えば難民問題や北朝鮮を連想させるもの、人間そのものについて考えさせるものもあった。また、本来の作品ではないのだが「表現の…」が休止していた間、多くの人とその再開を望む意見や展示に関するコメントをカードに書き、そのカードが壁面いっぱい貼られていた。皮肉なことに、期せずして皆でつくった強力な展示となっていた。

その後2回目の抽選もハズレたので見残した作品を観覧してから帰ることにしたが、内容も豊富で、充分入場料に見合う体験をさせてもらった。

帰宅して報道を見ていたら、会場外で抗議している名古屋市長の姿が映っていた。個人的にどのような考えを持とうとも自由だが、自治体の長としては、脅せば発言できなくなるという事実をくらすず、表現の自由を守るという行動をとるべきではなかったか。

そういえば20年ほど前、アメリカのスミソニアン航空宇宙博物館でエノラ・ゲイと広島原爆被害の展示をしようとしたところ、退役軍人や市民の猛反発により原爆被害の展示ができなくなった事があった。その時日本人が何を感じたか。今回の展示に反対した人は、あの時原爆展に反対した人たちと同じではないのか。どの国にも触れてほしくない事はあるのだろう。だが、それに目を背けていたのではいつまでも問題は解決しないし、尊敬もされない。逃げずに議論することが大切だ。

反対した人たちは日本をどういう方向に持って行きたいのだろうか。自由にものが言えないあの国や、戦前の日本のようにしたいのだろうか。

私は、日本をそういう国にはしたくないのだが……。

## 神戸大空襲の記憶 (2015.1)

川端泰子 (春日台)

子供の時のことゆえ、間違っていることも多いと思いますので、どなたかあの時のことご存じの方、ご訂正くださればと思いつつ記します。



### 1 第1回目の空襲(1945年3月17日)

私は、1935年12月生まれで、西須磨小学校の3年生でした。須磨区稲場町3丁目に住んでいました。

この3月の空襲のとき、隣保の方々は須磨海岸に避難されましたが、我が家では、妹が3歳ではしかに罹っていて風に当たると内攻するので逃げられません。

私は、冬ふとんを被って弟(小1)と、目と耳を指で押さえ伏せの姿勢で(焼夷弾で目玉が飛び出さないよう、耳の鼓膜が破れないよう、腸が飛び出さないよう、当時空襲時の防御姿勢として訓練されていた)ふとんの中で、空襲の過ぎるのを待っていました。時々廊下のガラス戸の外を見ると空が真赤、母は妹をねんねこで負って、廊下を行ったり来たりしていました。この空襲では、そのあたりの家は焼けずに残りました。

しかし、神戸駅近くの祖父の家(母の実家)や伯父(父の実家)、神戸の親戚のほとんどは焼け出され、命からがら須磨の我が家に歩いて着いたのを憶えています。

### 2 同年5月ころまで

その後、桜のつぼみの頃までに(庭に八重桜の木があった)、建物疎開のシールが門に貼られ、たしか1週間か10日後に立ち退きを命じられた。すぐ近くに須磨電話局があったので、類焼を防ぐため周辺の家を取り除こうとしたのです。急に言われても、行き先もなく(前年12月に父が病死)、月見山の親戚HA家に、その隣保に家財を置いたまま疎開しておられたY家を紹介してもらい、そこに母と子供3人が泊めていただくことになりました。私の家の家財は、稲場町のHIさん宅に預かってもらいました。Y家に居候している間に、離宮前に疎開して空き家となっていた家を見つけ、私ども4人はそこに落ち着くことになり、家財も引き取りました(当時の引越は大八車)。

5月頃、西須磨小1年の弟は岡山件赤磐郡高陽村の天理教の教会に疎開しました。小学校は閉鎖され、区役所になっていたように思います。

私は、4月から6月半ばまで垂水におられた隣保のSさん宅から垂水小学校に通うことになりました。授業中に空襲警報が鳴ると、Sさん宅へ帰り、そこからS家のおばさんや近所の方々と逃げました。S家は、子ども達は田舎に疎開し、ご主人のおじさん(小学校の教師)とおばさんだけでした。通学の途中でも、空襲警報になり、滝の茶屋附近で電車が止まったこともありました。



### 3 第2回目の空襲(6月5日?)

2回目の大空襲が6月5日(?)にあり、須磨の一带は全焼。稲葉町も、この間まで泊めていただいた月見山町あたりも焼けました。この空襲で今まで何かと助けて下さったHA家のおじさんは防空壕の入口あたりで即死(爆風で)。お婆さんは大けがされ、壕を這って出てきたそうです。山の手にある家なので、南から山の方に逃げてくる人たちを防空壕に入れてあげていました。おじさんは気の毒なことでした。もちろん家は全焼し、蔵だけが残り、その後お婆さんは蔵で生活されました。不思議なことに引っ越して

きた離宮前町は焼け残りしました。家財を預かっていただいたHIさんの奥さんと男の子が我が家の2階に同居されました(ご主人は応召中)。この空襲で大勢の方が亡くなられました。死者は須磨の北、多井畑の間の青山でダビに付しました。亡くなられた方は地面に置かれ、娘さんを亡くしたお母さんが「末期の水をあげたい」と泣いておられたのを今でも憶えています。

当時、防空壕は庭か、家の中では床板をあげ座敷の下に掘って居ましたが、家の中の壕に入っていたら焼死するだけです。「防火用水」は隣保に一つしかなく、空襲には何の役にも立ちませんでした。

### 4 6月の空襲のあと

だんだん追いつめられて、私は、母方の祖父の一家(母の実家)が焼け出され、頼った祖父の姉の嫁ぎ先、大阪府中河内郡高安村に疎開しました(9月?日ころまで)。離宮前の家に母と3歳の妹を残して。当時母は33歳。

その夏、戦争は熾烈となり、母と妹は須磨に居られなくなり、家を空けたまま(施錠せず、焼夷弾が落ちて消火できなかつたらいけないから)、母の弟(叔父)と3人で河内に逃げてきました。大阪までは国鉄で、そのあと、東に行くトラックに頼んでどこかまで乗せてもらったそうですが、人数制限で3人は乗れませんでした。その時、一人の方が飛び降りて下さって3人揃って来れたそうです。「その人を押んだよ」と母は話していました。夜中に歩いて、妹は叔父に肩車してもらって、たどり着き、終戦まで居たと思います。私は、9月?日まで高安小に通わせていただきました。

弟は、私のあと学童疎開から帰りました。頬がこけ痩せていましたが、元気で帰り、嬉しかったです。1年生でよく頑張ったと思います。弟は、大人になって、桃を食べませんでした。岡山で桃しか食するものがなかった時があったそうで、先生のご苦労が窺えます。

小学校の友達は何人も亡くなりました。私は、先生に道で会った時、「生きていたの」と言って貰いました。

### 5 その他思い出すこと

空襲はB29で、高度1万メートルのところから、爆弾や焼夷弾を落とします。下から高射砲で撃つのですが、全然届かない。赤く染まった空に影絵のように見え、何もできない。あきらめ。

低空飛行で操縦する兵士の顔が見えそうな位まで降りてくる(目があうことさえもあった)たしかP51と言っていたように思う飛行機から、機銃掃射でバリバリと、入っていた豪の上の土中に弾がささっていたこともありました。

当時ラジオは政府からの放送で、負けていても「帝国海軍は敵艦〇艘撃沈」などウソの放送をしていて、国民はこれを信じていました。

学校も開戦記念日の8日が来ると。全員が並んで「天神さん」へ「武運長久」を祈りに参りました。家の門に習字で「撃ちてしままん」「米英撃滅」と半紙に書いて貼り出しをしていました。神風が吹くとも言われていました。国民全てが同じ方を向かされ、疑問に思いませんでした。

教育も隣保の組織もおそろしいものでした。この隣保の組織で金属の供出がなされました。ミシン(お国のためのものを縫うため)、ダイヤモンド(飛行機に使う、これは大丸に持っていきました。終戦時、日銀本店にまとめてあったそうです)などなど。

思いつくままに記しました。神戸の片隅で小さかった私が見聞したことだけで、狭いことです。もう半年早く戦争が終わっていたら、沖縄も原爆も各地の大空襲もなく、亡くなる方も少なく、くい止められたはずと、とても残念に思います。

このようなことが二度と起こらない様に私達はどうすべきか、よく考えなくてはと思います。それから書き加えさせて下さい。母のすぐの弟はボルネオで特攻隊で戦死。その妻(叔母)は95歳になっています。

素晴らしき人たちとの出会い (2015.1)

K子(狩場台)

11月25日から28日、友人の誘いで「神奈川県学習協議会の企画したツアー」に参加しました。韓国の歴史を学ぶツアーでした。

4日間という短い時間の中で、大きな満足感を得られたのは、現地でお話をしてくれた人の優しさに触れたからでしょうか。人間の持つ力の大きさに圧倒されました。ここでは、お二人を紹介します。



1人目、1980年代の民主化運動にかかわったキム・イツキョンさんのお話の要約です。

「今、韓国も日本も歴史に逆行しています。生きることと死ぬことの間にあるのは、希望だと思えます。政治は、国民に絶望を与えていますが、市民運動はやっていかなければなりません。国家が個人を守ってくれないなら、守られるように何らかの声をださなければならない、運動したことは、必ず残っていきます。くじけずにやっていくしかありません。私は、貧乏ですが、絶望せずに生きています。そのことに大満足しています・・・」

イツキョンさんは、このお話を自然体で話してくれました。今の私たちを励ましているようでした。

2人目は、光州民主化運動の犠牲者が眠る墓地(写真)を案内してくれた「キム・ヨンチョルさん」です。ヨンチョルさんは、1980年5月18日、光州市民と学生が「軍」によって虐殺された「光州事件・民主化闘争について」一生懸命に私たちに説明してくれました。墓地を案内する時は、特に丁寧に説明をしてくれるのでした。犠牲者の一人ひとりについて、どういう亡くなり方をしたのか、家族の話にもおよび、犠牲者全員を知っているような話し方でした。「軍が自国の国民に発砲した。こんなことは、あってはならない。忘れてはいけないのです。民主化運動の魂は「民主と大同団結」だと力をこめて話していました。また「記憶されない歴史は、繰り返す」この言葉も、私たちに繰り返し力説されました。

韓国の歴史の中で、今、この民主化闘争は、民主主義の礎となったと歴史に刻まれています。軍事政権を倒した民衆の力は、どれほどのものだったのでしょうか。私には、想像もできませんが、多くの尊い命が犠牲になりました。

お二人を通して、歴史を学ぶことは、記憶するということであり、忘れてはいけない歴史があるのだと心に響きました。私の韓国の歴史を知る旅は、始まったところです。

#### 戦争法廃止 2000万人署名運動 (2016.1)

一人ひとりに声掛けをしていく

K子(狩場台)

戦争法廃止の2000万人署名が始まりました。

「タイムリーやね。さあ、みんなで集めましょうよ」という人と、「そんな数あつめられるんですか?」と悲壮感に満ちたつぶやきも聞かれます。

私は、両方の気持ちがわかります。それでも、「戦争法廃止のためなら何でもしたい」と、私の周りから始めています。

まず、署名用紙を渡して、手書きでお願いを書いて、後日訪問するという形から入っています。きちんと書いて下さる方、署名用紙入ってなかったと言われたり…。何度訪問してもお留守だったり。反応は、様々です。1人に声をかけることがどんなに大切か、どんなに大変かと身にしみる日々です。小心者の私は、1人と対話するだけで疲れます。

でも、断られてもいい。署名しない理由も聞く。1人してくれただけでも喜ぶ。

そんな風に気持ちを切り替えています。この法律だけは、廃止させなければ大変なことになってしまいます。



ここまでの危機感を、日本人はどこまで感じているのでしょうか？ あらためて思うと、私も、9条の会の活動にかかわらなければ「立憲主義」「集団的自衛権」も学ぶことはなかったと思います。ママの会や SEALDs のパンフレットには、そのことがわかりやすく書かれてあり、とても、勉強になります。集団的自衛権とは、他国の戦争に参加する権利のことです。(SEALDs)

憲法は、個人の人権を守るために国家の暴走をおさえるブレーキです(立憲主義)。だから、憲法違反の法律は、許されないのです。(ママの会)

はっきりと言い切る若い世代の賢さ、そして、彼らを育ててきた親世代もたいしたものだなあと…嬉しくなりました。

そして、憲法9条を考えた時、浮かぶのは、加藤周一さんの言葉です。「憲法9条の精神とは、国際紛争を解決する手段として、武器を使うことを考えないところから出発するということ」憲法9条の奥深さを考えさせてくれる言葉です。戦争法(新安保法制)は、憲法9条をなし崩しにしようとしています。

若い世代や9条の会を立ち上げた人たちに学んで、一歩踏み出したところです。



憲法カフェ 「緊急事態条項」を知っていますか (2016.7)

K子(狩場台)

6月24日、「緊急事態条項を知っていますか」と題して羽柴修弁護士のお話をうかがいました。自民党が提唱する改憲案の一つが「緊急事態条項」です。国家緊急権とは「戦争・内乱・恐慌ないし大規模な自然災害など、平常時の統治機構(国会や内閣などの行政・司法)をもってしては対処できない非常事態に、国家権力が、国家の存立を維持するために立憲的な憲法秩序(人権保障や三権分立)を停止する制度。自民党の改憲草案の98条と99条に創設されます。



羽柴弁護士は、緊急事態に「災害」まで入っていることに注目。被災した自治体のほとんどが、緊急事態条項が必要だと回答していません(被災地に一番近い市町村に主導権をとという要望が多い)。また、日本国憲法で、国家緊急権をいれていない理由は、過去の時代に個人の権利がふみにじられ、国家緊急権が乱用された歴史の反省にたち、あえて憲法にいれていない事実を話された。法律で対処できるように整備していく。

また、この緊急事態条項だけを問題にするのではなく、自民党の改憲草案全体をよく読むことが大事で、「天皇を元首とする」、「国防軍の創設」、「個人を人と言い換えている」ことなど、明治憲法に逆戻りの改憲案だと話されました。

参加者からは、ヨーロッパと比較してどうなのか。ナチスドイツの全権委任と同じだという主張には、抵抗があるなど質問が出て、活発な意見交換ができました。

今の安倍政権のもとで、特定秘密保護法や安保関連法が国民の多くが慎重審議を求めているにもかかわらず強行採決されたことを見ると、この「緊急事態条項」の怖さが見えてきました。

久しぶりの憲法カフェ。参加者から「一定理解できた」「いい企画でした」と感想がよせられました。

安倍首相への手紙 (2015.10)

こづくえ・えつこ (美賀多台)

初めまして。新入会員です。専門家が多くいらっしゃる会で憲法に触れるのはおこがましいことですが、やっぱり気になります。次の文は、安倍首相(+支持者)への手紙です。



安倍首相へ

私はあなたが政権を担われることを最も怖れておりました。

あなたの政策は、「おじいちゃん(岸信介元首相)のため、安倍家のため、そして、自身のためのもの」ではないかと。多くの国民が不安を覚える「安保関連法案」を、違憲と知りつつ(?)採択しようとしている。このような憲法解釈・違憲行為は、憲法改正と同じ程に許し難いものと言わざるを得ません。或る憲法学者は「法匪」と呼んで批判していますよ。

憲法(constitution)の定義を調べてみました。広辞苑では、『国家存立の基本的条件を定めた根本法。変更することを許さない国の最高法規』、英英辞典では『a lot of basic laws and principles that a DEMOCRATIC country is governed by, which cannot easily be changed by the political party in power』。

このように、国の骨格を示す法規であり、時の政治勢力の都合で変更できないものである。

安倍さん、どうして平和憲法を軽んずるのですか。GHQ から押し付けられたものだと思っているのですか。敗戦後、GHQ は新しい憲法の草案を作成しました。絶対君主だった天皇を象徴に、主権在民、平等な選挙権、そして9条などなど。どれも素晴らしいものではありませんか。当時の日本人だけの政権でこれだけのことができたでしょうか。天皇を戦犯として裁くことも出来ずに、日本帝国という幻想からの脱却や軍隊の解体ができたでしょうか。国民は皆平等となり得たでしょうか。

私は、今の憲法は世界に誇れるものだと考えています。平和憲法があったから、日本国や日本国民は世界に受け入れられました。また国民は平和を享受し、経済発展を遂げることができました。これからは、あなたの言う「積極的な」方法ではなく、平和憲法で、強者(国)ではなく、弱者(国)を暖かく支えようではありませんか。

「建国記念の日」について思う (2016.2)

～ この不思議な日 ～

こづくえ・えつこ (美賀多台)

1966年にこの日が制定されてから半世紀。もうしっかり認められ、定着したようです。勤労者は、寒い時期の休日として「助かる！」って日です。私もそうでした。でも毎日が日曜日という状況になった現在、再び気になり出しました。



今の「建国記念の日」は建国をしのび、国を愛する心を養うとされています。言うまでもなく、2月11日は神話上の人物である神武天皇が初代天皇として即位した日とされています。これは弥生初期に当たるそうです。神話とは言え、余りに歴史とかけ離れています。また、この神話は天武天皇の命により編纂されたものです。天皇は神に連なる特別な存在であると述べ、とりわけ武力で皇位を得た天武天皇にとっては王権を根拠づけ、永続させるための神話だと考えられる。その上、記紀神話には、人間の誕生など一般民衆についての記述が全くない。私は神話を否定する気持ちはありませんが、この神話が「私たちの神話」であるとはとても思えない。このような支配者の成立を語った神話を根拠とするのではなく、歴史的事実から「建国記念日」を設定し直すことを提案したい。

参考までに諸外国の独立記念日(=建国記念日)を調べると、①植民地・委任や併合統治からの独立、②合併・統一・分離、③革命・クーデター・王政の廃止、④特別に記念すべき日。以上のように、ほとんど全ての国が歴史上重要な出来事があった日を選んでいきます。

このような観点から、日本の建国記念日は9月2日(先の戦争が国際的に終結した日)か、5月3日(憲法記念日)のいずれかが妥当だと思う。

アベ政権は夏の参議院選挙に勝利し、憲法改正を目論んでいます。世論調査では憲法改正反対が過半数を占めていますが、アベ政権の姑息な政策によりどうなるか不安を覚えます。建国記念日を変更して戦争を真に反省し、平和憲法を守っていくことの大切さに思いをいたす日にしたいものです。

日帝(日本帝国主義)の象徴:アカシア in KOREA (2016.4)

こづくえ・えつこ (美賀多台)

韓国での勤務先は高台にあって向かいの山が見渡せた。切り立った山でハングライダーがふわりと浮かんでいるのをよく眺めた。初夏の頃、いつものように山々を見ると山裾全体に薄雲がかかったように白くなっていた。なんとも幻想的な風景で、何が起こったのかわからないままにしばらく眺めていた。それから毎日、少しずつ薄雲は濃くなり頂上へと広がっていった。やっと私にもそれが



「白い花」であることがわかった。韓国では、「木」と言えば「松の木＝国の木」を意味する。多くの山は松の木で覆われていて、この山のように「白い花の咲く木」で占められているのは少ない。後日、この木がニセアカシア(アカシアと一般に言われている)であることが解った。

ある大学の「観光による地方の活性化」というプロジェクトに対して、日本人としての意見を求められ現地調査に参加した。この地もアカシアの花が満開であった。見事なまでに大きな房を付けた木が点在し、思わず感嘆の声を上げていた。どこからか声がした。「韓国人はアカシアをどのように思っているか知っていますか。日帝の木と呼んでいます。日本が持ち込んだものだとも」。これを聞いたときの衝撃。今もアカシアの時期になると思い出す。



ニセアカシア

ニセアカシアは unwelcomed な木。強い生命力でどんな地でも生育し、その土地固有の樹々(韓国では松の木)を追いやってゆく。また、繁殖力が強いので一度持ち込まれたアカシアを除去するのは困難らしい。この様子が日帝の韓国併合・同化政策(姓名や言葉などあらゆる面での日本化)による韓国侵略と重なってアカシアが悪者にされたと思う。

「恨は500年続く」という朴槿恵大統領の発言があったとき、その長さに驚いたが韓国の歴史がもたらした長さなのだと思う。今でも、韓国人がアカシアを「日帝の木」と考えているかはわからない。発言した彼女とは交流が続き、親日家で日本について深く学んでいることを知った。でも留学するとすればアメリカだとか。

『靴を踏んだ人は忘れても、踏まれた人は忘れない』・・・中国、韓国の諺

## 独立宣言からこぼれ落ちたアメリカ・インディアン① (2016.6)

～いつになったらアメリカ市民になれるのだろうか～

こづくえ・えつこ (美賀多台)

世界には独立国家を持たない少数民族の居留地がある。これらの人々は、多かれ少なかれ苦難の道を歩み、絶滅に至った民族も少なくない。少数民族は特有の文化や宗教を持ち、世界の多様性、豊かさに寄与している。しかし、近年の排除傾向の強まりが危惧される。こんな時代故に、私が旅行で出会った少数民族や大国のエゴで文化的、経済的、宗教的な豊かさから遠ざけられている人々のことに触れてみたい。



私がアメリカ・インディアンに強い関心を持ったのは、小さな記事が発端だった。自然史博物館に展示されている隕石のアメリカ・インディアンへの返還を巡る裁判記事であった。『祭事を行っていたという神聖な石。この隕石の部族への返還を求めて司法に訴え、その裁判で勝訴したがあまりに大きくて建物から運び出せない』。随分以前の記事なので記憶違いがあるだろうが、以上のようなものであった。胸が痛むことに、その石は崇拜の対象ではなく、「単なる無機物」として、今でも博物館に展示されているはずである。根底にあるのは、一神教(この場合キリスト教)のアニミズムや多神教に対する敬虔心のなさか。

現在アメリカ・インディアンは保留地を与えられ、そこに住む限り僅かな年金が与えられている。保留地は不毛の地が多くて産業を持たず、貧困にあえいでいる。以前、アメリカ南西部の砂漠(保留地)を走っていたとき、数人の青年が台の上にトルコ石の粗末なアクセサリーを並べて売っていた。通る車は少なく、商売にはならないだろうが、収入とともに、働くことが生きることの証なのだろうかと思ったりした。彼らはとてもシャイで、というよりも、表情もなく、まるで死んでいる人がのろのろ働いているような感じだった。きっと長い苦難の歴史がDNAとなり、今も続いているのだ(続く)。

## 独立宣言からこぼれ落ちたアメリカ・インディアン② (2016.8)

～国家の行為は罪にならないのか～

こづくえ・えつこ (美賀多台)

アメリカには触れられたくない、触れてはならない3つのタブーがあり、これらは教育現場でも取り上げられることはないと聞いたことがある。その1つがアメリカ・インディアンの土地収奪・保留地への強制移住である。これは歴史上に起こったことにとどまらず、現在も続き彼らを苦しめている。



核開発競争が激しい頃、「核実験がアメリカの砂漠で行われた」という記事が度々報道されていた。居住者はおらず、人への核汚染の心配がない地域かなと思えるが、実はそうではなかった。石山徳子明治大学教授は次のように述べている。『核開発の現場は、先住民族の生活圏と重なる。大気中に大量の放射性物質を故意に放出し、70年代初めまで原子炉の冷却水を川に垂れ流して周辺地域に深刻な環境破壊と健康不安をもたらした。アメリカの安全保障のためになされた核開発は、国家によって切り捨て可能とされた社会的弱者や周縁化された土地の存在があったからこそ成立した(抜粋)』。この地域の部族のリーダーが発した『私たちは全てを失ったが、ここを離れる選択肢はない』という言葉は、アメリカ国民に届いているのだろうか。



土地を奪われ、生活基盤や文化を喪失し、それに抗することもできずに保留地での希望のない生活を受け入れざるを得ない状況とはどのようなものなのか想像もできない。精神を病んだり、アル中になったりする人も少なくないらしい。また、このような状況から脱出すべく保留地の外に希望を見出そうとする者もいる。City Indian と呼ばれるが……夢は実現したのだろうか。「すべての人間は生まれながらにして平等であり、生命、自由および幸福の追求を含む不可侵の権利を神から与えられている」と独立宣言は述べている。いつの日か、「すべての人間」の中に先住

民族が含まれる日が来ることを願う。

保留地で自立を目指し、真の人生にしたいと励んでいるアメリカ・インディアンの若者たちの澄んだ眼差しが忘れられない。

## シベリアへの旅 (2017.8)

こづくえ・えつこ (美賀多台)

シベリアといえば、永久凍土、流刑地、先の戦争の兵士の抑留と厳しい印象があって行ってみたいと思う地域ではなかった。はじめて、この7月にシベリアでも南に位置するバイカル湖を訪れた。冬は凍ってしまうバイカル湖も、この時期には深青緑の水をたたえ、海のような波が打ち寄せていた。革命後、シベリアに逃れて来た多くの人々が冬季にここに達して湖上で凍死し、氷の溶ける春、次々と湖底に沈んでいったこと(真実?)など信じられない穏やかな湖であった。今回の旅行では湖のほとりのシャレーに泊まりウオーキングを楽しんだ。



ガイドの大学の先生の説明によれば、ロシアからコサックがシベリアに侵入した際、アメリカで起こったような土地を巡る衝突・戦争は起こらなかったか。先住民は遊牧を生業とし、侵入したロシア人は狩猟による毛皮交易と「住み分け」られたことが幸いした。その結果、お互いの文化・宗教が尊重されロシア正教を押し付けられることもなく、先住民はシャーマニズムなど彼ら独自の宗教を守ることができたということである。シベリア最大都市イルクーツクの街では、建物に太陽・月・雨などを表す文様が施されていてシャーマニズムの影響が見られて興味深かった。

また、ロシア正教はキリスト教の一神教の要素が減っているように感じた。教会内の壁はキリストや聖母子、守護聖人などのイコンでぎっしりと埋め尽くされて信仰の対象になっている。イコンは聖像ともいわれ、聖像を通して神と向き合い信仰することから、偶像(偶像は像そのものが信仰の対象となっている)と一線を画されているが、私には偶像崇拜と大して変わらないように思えた。形がない、目に見えないものを信ずるのは難しい。そのために、多くの宗教は解り易いように像を造ったり、描いたりして一般大衆を信仰へと導いているような気がしてならない。そのためのイコンと考えられなくもない。

抑留兵士の墓参に際して思う(友人との合作)。

夏草や 抑留兵士 墓碑残し